
しあわせになりたい

蒲公英

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

しあわせになりたい

【Nコード】

N6570P

【作者名】

蒲公英

【あらすじ】

出会いました。さあ、恋をしましょう・・・と、コトはサクサクと進まないものです。右往左往して始まる恋愛模様。コンプレックスが深くなった、天然ちゃんだって、ちゃんと人を好きになります。向き合うのに少々時間がかかって。

「恋をして、しあわせになる」ただそれだけのお話です。

R15、つけました。

boy meets girl 1

156センチ、47キロ、靴のサイズは23.5センチ。

髪は細く、色白の小さな顔には黒目がちの大きな瞳と輪郭の整った唇。

華奢な身体は程よく筋肉がのっているらしく、意外なほど敏捷に動く。

ラインの美しい顎から続く細い首に隆起しているものは――喉仏。
「男だっ！バカヤローっ！」

篠田龍太郎の得意技がボディーブローなのは、頭部よりも腹部のほうに手が届きやすいからである。もちろん、そうそうそれを喰らうものはいないし、彼は冷静な男なので、怒りを飲み込むことも出来る。小柄で女顔だとはいえ、未成熟なわけではない。コンプレックスの分、闇雲に「男だ」と強調するキライはあるにしろ、概ね真つ当な社会人であるし常識人だ。恋愛だって、けて未経験ではない。芸能界にでもいるならば、その華奢な体格と可愛い顔はセールスポイントだろう。

俺、自分を商品に見せるような才覚ねえし。

彼はごくごく一般的な会社員であり、出勤する時はセオリー通りネクタイだって締めている。成人式の時に、姉に七五三とバカにされた記憶があつたとしても、同僚たちが秘かに「化粧させたい」と囁いているにしても、ただし、作業着のサイズはSでも袖丈が余る。

そして、新規の取引先に、「あの、ちっちゃい女の子みたいな」と覚えられていたりする。

「篠田君って本当に可愛いもんねー」

「大の男に可愛いって言うな！」

「大じゃなくて、小じゃーん」

同僚たちとのお約束の会話に、笑いながら実は深く傷ついていたりもする。

文系の大学を出て中規模の住宅メーカーに就職、内勤希望だったにもかかわらず、就職先での配属先は「設備部」だった。営業部のように個人相手の気詰りはないが、下請け会社は現場オンリーのごついオジサンたちだらけだ。見た目が頼りない龍太郎の指示なんか、てんでバカにしたものだ。

努力に勝る才能なしって言うけど、俺の見た目は努力でどうにかなるのか。

コンプレックスは深くなる一方だ。

大体、この見かけに置いて「本当に欲しかった愛」をいくつ逃したことか。一番悲しかったのはあれだ、シルバーのペアリング。

「龍太郎君の指って、私より細いのね」

彼女はそれからしばらくしてから、「包んでくれると実感できる男」を見つけて去っていった。

boy meets girl 2

「フォレストハウスさんって、女の人も現場に出るんですか」

そう声をかけてきたのは、取引先の空調設備会社「エア・トラッド・ジャパン」の営業、津田だった。龍太郎よりも丸々頭ひとつ分デカい。

「先刻名刺渡ししましたよね。龍太郎なんて名前の女がいると思います？」

確かにバタバタと挨拶したので、声を出さなかった記憶はある。思い切りよく見降ろされ、まさに上から下まで見回されてから「すみません」と小さな声で詫びが入った。いくつか歳上であろうその相手に頭を下げさせたのだから、腹が立とうがどうしようが、こちらも頭を下げなくてはならない。

「よく言われちゃうんですよ。ツラもこんなですし」

「あははっ。本当ですね。男にしておくの、もったいないようですねえ」

見降ろして笑うな。ボディーブローかますぞ？

龍太郎は握りしめた拳を開く。怒っても仕方ない。相手はバカにしたり貶したりしていいのではないのだ。

龍太郎の会社の入っているオフィス・ビルは本館と別館が渡り廊下で繋がった形のつくりである。別館にどんな会社が入っているかは知らないが、ビルの逆側に出るために、時々渡り廊下を通って別館のエレベーターを使う。

その日は珍しく、内勤日だった。昼食をとるため、龍太郎は同僚たちと別館のエレベーターに乗り込んでいた。雑居のオフィス・ビルなので、見たことのない人間は多数いるし、その中に女の子の集団がいてもおかしい訳じゃない。

うっ！カワイイ！

知らない集団の中に思いつき好みのタイプを発見し、ひそかに観察していると、急に目が合った。慌てて逸らす。集団のランチの相談はまとまらないらしく、なにやら意見を出し合っている。

「あたし、『たぬきや』で鮪丼がいい」

龍太郎の視線の先が主張する。

「え？あそこ、盛りが良すぎない？食べきれるのなんて、あんただけよ」

「あそこなら、大盛とかおかわりとかしなくていいもん」

『たぬきや』は、どちらかと言えば客層が男向けの、量の多さが売り物の店だ。中でも鮪丼は、男でも満足する量で人気がある。龍太郎含む三人で、これから行くところだ。あの普通なら特盛りと言われる量を、この女の子が嬉しそうに食べるのか。

見たいっ！

「あんたの胃袋になんか、ついていくヤツはいないっ！」

好みの女の子は集団の中に巻き込まれ、龍太郎の目的地とは違う場所に連行されていった。あーあ。

girl meets boy 1

松山美緒は不満だった。

みんな、ランチの量をどうのこうのって言うけど、三時頃にはしつかりティータイムとか言ってお菓子食べてるじゃない。それで終業頃にまた、小腹がとか言ってお菓子食べてるじゃない。

食が細い筈の人たちが自分より太っているのはそのせいだ、と分析する。美緒には間食の習慣は、ない。ただ「女性のためのランチ」では帰宅までは持たないので、まわってくるお菓子を口に入れたりする。

食が細いことを女らしいことだと勘違いしてるヤツ、出て来い！そして美緒の観察結果、無駄に太っている人っていうのはトータルでカロリーをとっているのである。美緒が太らない体質なのではなく、「食が細い」筈の彼女たちは間食によって美緒の一回相当の食事量よりも多くカロリーを摂取している。

力がないことを女らしいことだと勘違いしているのも、どうしたものか。

高速プリンター打ち出し用のストックフォームを、ただか二箱運ぶために台車が出てくる。美緒が持ったまま階段で移動しようとする「バカ力」と評される。10キロもないものを持ち上げて「バカ力」が聞いて呆れる。一歳児だって、それくらいの重さはあるのだ。

子供を抱いているお母さんが全員力持ちじゃないでしょ！

とりあえず、彼女たちから見て美緒は女らしくも色っぽくもないらしい。女は男に「守ってやりたい」と思わせなくてはいけない、らしい。

「松山さん、お茶入れてくれない？」

上司が普通の顔でそれを言った時、美緒はすごいスピードでキーボードに数字を打ち込んでいた。売上締めの日、一刻も早くデータ入力を終わらせて、経理に報告したいところだ。ちなみに、衛生材料の卸売りである。

「今、手が離せません！」

「そんなこと言わないでさ、冷たいなあ」

客じゃあるまいし、お茶くらい自分で入れやがれ！

「大木君っ！部長がお茶入れてくれてっ！」

「女の子の入れてくれたお茶のほうが美味しいんだよ」

アホかつ！給湯室にはお茶っ葉は一種類しかないわっ！

美緒はしぶしぶ立ち上がって、部長の特大の湯飲みを受け取り、給湯室に向かう。

湯飲みを部長の席に置いて席に戻ると、メモがあつた。

——経理より、売上報告の督促あり。

伝票は、残すところ5枚である。

バカヤロ——！

上司に向かってそれを叫ばないだけの良識は、ちゃんと持ち合わせている。女の子は急ぎの仕事よりも上司のお茶汲みを優先するべきだと考えている、前世紀の遺物はそうそう消えてなくならない。

girl meets boy 2

「そんなだから彼氏ができないのよ。せつかく悪くない素材なのに」

何度それを聞いたことだろう。女の子をアピールすることが恋愛に結びつくわけじゃない、と美緒は思う。出会いのチャンスが遅いだけだ。

二十二の処女の、どこが悪い。

高校生の頃に、彼氏らしきモノは居た。卒業と同時に終わってしまったけれど。短大時代には彼氏らしい彼氏はいなかった。会社の中に若い男がいないわけでもないが、好ましく思う男はいない。結婚退職が当たり前の会社って、今時珍しい。

経理への報告がようやく終わると、十三時半になっていた。

「お昼休み、三十分ください」

財布だけ持って部長に申告すると、会社を飛び出す。会社の近所でランチができるところは、夜に居酒屋へとシフトするので、十四時を過ぎると休憩に入ってしまう。

お茶入れるじゃなくて、昼休み返上で仕事したあたしを労え！

美緒の部署にはもう一人、同じ営業事務がいるのだが、彼女は自分の仕事が終わっても美緒の仕事に手を出さない。ある意味気楽ではあるが、自分の持ち分の仕事が多い時には不公平な気がしてしまう。

「鮎井お願いします」

昼の混雑の終わった『たぬきや』には、客が数人しかいない。

あ、ほらっ！あたしじゃなくても、ひとりの女の子いるじゃない！同志！

美緒の視線の先には、ボーイッシュなショートカットの、白いシャツに作業着を羽織ったパンツ姿の一人の姿があった。女の子でも技

術職に就ける会社っていいな、なんてぼんやりと見ていると、目が合った。彼女は戸惑ったような顔で軽く会釈をする。

知ってる人だった？

「お勘定お願いしまーす」

レジに立って店の人に向けた声は意外に低くハスキーで、ポケットから無造作に出した財布は黒だ。

えーっ！もしかして、男？

そういえば腰がやけに細い・・・後ろ姿を思わず確認して、パンツがメンズ仕立だと気がつく。顔をあげると、肩越しに振り向いたその人と、もう一度目があつた。

・・・どこかで、会った？

エレベーターは極力使わず、五階までの上り降りは階段で。体力づくりを兼ねて、龍太郎が毎日実践していることだ。もちろん、同僚が一緒の場合にはエレベーターを使う。別館から地下に降りた守衛室に用事があり、渡り通路から階段室に入って二階分降りたときに、珍しいものを見た。

ダンボールを肩に担いだ女の子である。腰で持ち上げているとか、台車に乗せているのではない。（階段では当然、台車は使えない）軽々とはなく、支える腕に力が入っているのがわかる。あの子だと気がつくのに時間はかからなかった。

何故エレベーターを使わない？

当然の疑問だ。

二階まで降りて、階段室のドアを開けるために彼女は一度段ボールを床に置いた。ドスンと重い音がする。龍太郎が思っているよりも、更に重いものが入っているらしい。ドアを固定して、もう一度担ぎ上げる時に「せいっ！」と威勢のいい掛け声が聞こえたので、思わず笑ってしまう。荷物を担ぐことに夢中になっていたらしい彼女は、他に人がいるとは思っていなかったらしい。ぎよつとした顔で荷物を担いだまま振り向いて、よろけた。

龍太郎が慌てて荷物を支えると、体勢を立て直して頭を動かさずに礼を言った。そして、どうしていいかわからない顔のまま、フロアの奥に消えていった。

ヘン！あの子、なんかヘン！

消えていったフロアの奥を振り向きながら、龍太郎は笑いを噛み殺した。

倉庫から引っ張り出してきた石膏ギプスのサンプルの箱を会議室

の机に降ろした後、美緒は改めて先刻の出来事を思い出す。

やっぱり男の人だったなあ。同じビルの中にいたのか。なんであ
たしの顔、覚えてるんだろ。

重い荷物を肩に乗せたので、首の筋がおかしい。

あたしよりも華奢で可愛かった。アイドルってナマで見ると、あ
んな感じなのかなあ。ってか、あたし、ちゃんとお礼言った？肩痛
いし転びそうだしで、なんかヘンな顔してたかも。

そこまで考えて、美緒は頭を仕事モードに切り替えた。

ま、いいや。どうせ知らない人だし。

「ケーキ、食べてかない？」

同僚たちと一緒にビルを出ると、美緒の前から覚えたばかりの顔が歩いてきた。

ネクタイ締めてる！似合う！

多分身体のリフォームに合わせて選んでいるだろうネクタイは細身で、童顔がシャープに見える。

「先程は、ありがとうございました」

軽く頭を下げると、笑顔が戻ってきた。通り過ぎ、同僚に「誰？」と聞かれる。

「知らない。さっき、ギプス運ぶ時にちょっと手を貸してもらったの」

「かわいいけど、背、低過ぎかな」

たしかに、あたしよりも小さかった。

女の子の集団とすれ違って背中に視線を感じた龍太郎は、思わず振り向いた。挨拶を交わした女の子とは別の何人かがこちらをちらちらと見ている。

言ってることは知ってるんだ。顔は良いのに背が低すぎるとかなんとか。

事実だ。絶対に否定はできない。盛大に溜息をついた。

せめて、中身だけでも男にしようと。男のおばさんにならないように。

「身長って重要項目？」

声が聞こえなくなったあたりで、美緒が発した言葉は、知らない。

「篠ちゃんの身体のどこに、俺と同じ量の食い物が入るわけ？」

龍太郎の同僚・藤原の発言だ。

「胃袋に決まってるだろ。頭とかケツのわけあるか」

仕事帰りのラーメン屋で、ビールを飲んでから大盛のタンメンと餃子を頼んだ。20代半ばにして腹まわりを気にし始めた藤原は、休日にせっせとジムに通っている。

「その顔でそのセリフ、ヘン」

「好きで女顔じゃねえっ！」

殊更男を主張したような藤原の、縦にも横にもがっちりした体格を眺めてみる。一緒に居ると、自分が余計に小さく見える気がする。しかし、社内で一番気が合う。

フジミみたいな外見なら、違う人生だった気がする。そんなコンプレックスが何の役にもたたないことは、龍太郎だって理解しているのだ。

「おはようございます」

駅から会社に向かう途中、龍太郎の背に声がかかった。と、挨拶を返す間もなく、声の主は早足で抜き去っていった。

あれ？あの子だった？

交差点の雑踏を走るように進む女の子は、やけにパワフルに見えた。遅刻間際なのかも知れない。セミロングの髪が揺れる。

なんていうか、身体に気合いが詰まってる感じ。

同じビルへの道を歩きながら、龍太郎はなんとなく浮き立つ気分になった。

美緒がお茶当番のため、給湯室で部内全員分のお茶を入れていると、同期の鈴森がロッカー室に行く前にひょいと顔を出した。

「おはよ。この間の小さい彼、本館の五階の会社だね。本館から入ったら、誰かとエレベーターに乗ってた」

「止まる階見てたの？朝からヒマだね。自分より背が低い男はヤダとか言ってたかった？」

鈴森は長い巻き毛をひとふりして言う。

「え？つきあうんなら背が高い方がいいけど、観賞用にいいじゃない。この会社、顔面レベルの高い男はいないし」

「人間に対して観賞用って失礼な」

つきあうのはイヤだけど観賞用、なんて言われたらいやだろうなあ。

美緒はうる覚えの顔を思い出して、気の毒になった。本人の責任じゃないのに。

同じビルの中にも、他の会社の人間と顔をあわせることは、意外に少ない。職種が違えば時間帯も違う。龍太郎は朝、駅から会

社へ向かう道でキョロキョロする。

実際のところ、どんな子なんだろ。

顔が好みだと言っても、即座に恋愛に結びつくほど子供ではない。
ただ、興味は惹かれる。

きょとんとした悪びれない顔してて、やけにパワフルな子。

龍太郎の美緒の評価は、今のところそんな感じだ。そして、それ以外の評価もしてみたいなーなんて、思っているのだ。

Encounters you 1

さて、翌週の土曜日のことだ。外部の会社との合同会議で「お茶汲みをするため」美緒は出勤していた。会議に出席しているわけではなく、仕事はお茶出しと茶碗洗いと資料配りである。

半日出勤つくから、良しとしよう。休みの日の事務服って、なんだかなあ。帰りにお買い物でもしてこ。

土曜日のオフィス・ビルは森閑としている。溜めこんだ仕事があるわけではなく、書類の整理で時間をやり過ごす。会議が終わって茶碗洗いを済ませると、誰もいない更衣室で着替えながら「つまんなーい」と呟いた。

帰りに誰かと待ち合わせでもしとけばよかった。

同じく土曜日の午前中、龍太郎もオフィスに居た。こちらはお茶汲みでなく、月曜日から着工する現場図面の、最終確認のためだ。前日の晩に忘れていたのを、朝起きて思い出したのだった。

危ねー。これでミスがあると、ますますバカにされる。

見た目が頼りない分行動で示さないと、現場のオジサンたちの信用は得られない。正式に休日出勤ではないので、ジーンズにMA-1の軽装だ。

土曜日にビルの正面玄関は閉まっている。守衛室の横の出入り口を使うことになっている。美緒が金属の重い扉を開けようとすると、階段から軽やかな足音が聞こえた。

「あれっ」

声をあげたのは、龍太郎が先だった。美緒は一瞬、警戒するような顔になった。

「土曜出勤？俺です」

気楽な口調に、ああ、と思い至る。

「私事です。今、あがつたところ」
そのまま、駅への道を並んで歩いた。

「腹減らない？昼飯に行こうよ」

どっちでもいいんだけど、のニュアンスを含めて龍太郎は美緒に話しかけた。

「それとも他の男と食事なるとすると、彼氏に怒られちゃう？」

つまり探りを入れていいるわけなのだが、それに気がつくには、美緒は未経験過ぎだ。

「怒る人はいませんけど。えーっと、名前も知らない人と」

「篠田龍太郎。そっちの名前も教えてくれる？」

「松山美緒です・・・じゃなくって」

「もう、名前も知らない人じゃないでしょ？」

すれてない子だなと思う反面、危なっかしいなと龍太郎は思う。

咄嗟のきりかえしができなくて、ワケわかんないうちに俺みたいな男とメシ食うことになってる。本当は、ついて行っていないものかどうか、判断できてないんだ。

なんだか要領を得ない顔の美緒を誘導して、ガラガラのおフィス街で開いている店を探す。夜に居酒屋にシフトするような店は、土曜日は休業だ。やっと営業している店を見つけて、向い合せに座る。

「俺、海老カレー。大盛りで」

「あ、あたしも同じにしてください」

店員を呼んで、オーダーをする。

「海老カレー、大盛りでふたつ・・・でいいんだよね？」

龍太郎は美緒に確認して、ハイ、と頷く生真面目な顔を見て笑った。

Encounters you 2

「何か、笑われるようなことしました？」

「いや、この前『たぬきや』だったなっと思ってただけ」

よく覚えてるな。そんなにインパクト大？

美緒はちよつと口を尖らせた。

「改めて自己紹介するね。篠田龍太郎、二十四歳。フォレストハウス勤務」

「え？歳上？」

龍太郎は大袈裟に肩を落とすアクションをした。

「・・・いいけど。いくつに見えてた？」

「ハタチくらい？下だと思つてて」

口に出してから、失礼だったかしら？と気にする。

若く見えたりするの嫌がる人、いるよね。

表情のわかりやすい子だな。

美緒の顔を見ながら、龍太郎は思う。何かを口に出すたびに表情が変わる。

「ところで、松山さんはいくつ？」

「二十二です。サカイ衛材勤務。営業事務、一般職」

あ、怒つてない。良かった。

美緒はそう思いながら、改めて龍太郎の顔を見直した。

程無く運ばれてきたカレーを食べながら、ポツリポツリと当たり障りのない話を繋げてゆく。音楽の話、映画の話、最近のニュース。少しずつ噛み合わず、歩み寄りの必要な会話だ。

うわ、可愛くても男の人だ！

龍太郎の迷いのないスプーンの運び方に見惚れて、美緒の手が止まった。

「どうかした？」

「食べるの、早いですね」

「あ、ごめん。俺だけ食い終わったら、気、使うよね」

どきん。

美緒の心臓が大きく鼓動を打った。

もしかして、男の人とふたりで食事するのはじめてかも。

そして突然、緊張が襲ってきた。

どうしよう。飲み込めない！

「口に合わなかった？」

「いいえっ！美味しいですっ！」

無理矢理最後まで食べて、美緒はスプーンを置いた。食べ残しはマナーに反する。

胃、おかしくなりそう。

Encounters you 3

美緒が財布をバッグから引っ張り出している間に、龍太郎はさつさと会計を済ませて店の外に出てしまった。

「払いますっ！」

「つきあってもらったんだから、いらないよ」

そんなわけには・・・と美緒が言いかけるよりも前に、龍太郎は歩き出した。仕方がないので、後を追って歩く。

「あ、じゃあさ、お茶奢って」

龍太郎が指差した先は、チェーンのコーヒーショップだった。

あまりに簡単に誘導できてしまうので、龍太郎にはずいぶん余裕ができる。遊びなれた女の子が、誘われたフリをしているわけではないらしい。龍太郎の目の前に座っている女の子は、改めて緊張した顔をしているのだ。

柴犬かなんか手懐けてるみたい。

「この前担いでたダンボールって、すっごく重そうだったけど」

「重かったんですよ。あのあと、首の筋がヘンで」

「エレベーター使えば良かったのに」

「階段のほうが早いと思って無精したんです。途中で後悔したけど担いだ後だったし」

「担ぐって行為自体が、女の子じゃ珍しいでしょう」

「だって、腰で支えたら階段下りられないし、肩なら大丈夫かと思っ
つて」

「そんなの、持てないからって誰かに頼めばいいのに」

「え？だってちゃんと移動できたもん。できるのにできないって言えないもん。運んどいてって言われたの、あたしだし」

美緒は口を尖らせた。

やっぱり、なんかすつごくヘン！必死で重いものなんか持たなくても、男に頼めば苦もなく運ぶだろうに。

「松山さんひとりで運べなんて言われなかったんじゃない？」

「そう言われると、そうかも」

大真面目に頷く表情に、なんとなく性格の一端を垣間見たようで、龍太郎は吹き出した。

「何で笑うんですか」

そう言いながら美緒も吹き出し、ふたりで大笑いする。緊張はほぐれたらしい。

「メアド、教えて」

「あ、じゃあ交換しましょう。篠田さんのメアドもください」

データを交換してコーヒーストップを出て、駅まで歩いて、違う路線の電車に乗った。

かわいい顔してるんだけど、なんだか不思議な子。

龍太郎はM A - 1のポケットから携帯電話を取り出し、電車の中でアドレスを確認した。

見た目は頼りないけど、仕草も喋り方も、ちゃんと大人の男の人。美緒は地下鉄の窓に映った自分の顔を眺めながら、龍太郎の細い指を思い出していた。

Encounters you 4

―先刻は、ご馳走様でした。

龍太郎の携帯電話が震えたのは、洗濯機が洗濯終了のブザーを鳴らした時だった。一週間分溜めた洗濯物は、主に下着だ。

―こちらこそ。

そう打ち込んだ後、ちよつと考えてから付け足した。

―今度は、飲みに行きましょう。

少し置いてから、返信が来る。

―お酒、強くないんです。それでも良ければ。

返事としては、そこはかとなく微妙である。

返信をした美緒の顔も、実は微妙だ。

「ふたりで飲みに行きましょう」なんて誘われたら、どうしよ。

イヤな訳ではない。美緒だって誘われることはあるし、露骨な下心にはパスもする。短大時代、友達に何度か男の子を紹介されたこともあった。ただ「この人が好きで、つきあってみたい」と思う相手がいないただけだ。だから一度お茶を飲んだだけで「つきあっちゃおうか」なんて言われたら、とてもバカにされた気がするのだが。「つきあってみなくちゃ、好きになるかどうかわからないでしょ!」何度友達にそう言われたことか。相手を限定してしまってから好きか嫌いか考えるなんておかしいと、美緒は頑固に考えていたりするのだ。

「えー?ご飯食べに行ったの?次の約束とかしたー?」

月曜日の朝、鈴森に土曜日の話をした美緒は、興味津々のツッコミを受けた。

「約束はしてないけど、今度は飲みに行きましようってメールがあった」

「いいじゃん！行っちゃえ！顔いいじゃん。背、低すぎだけど」

「いやだから、背が低いのは本人の責任じゃないし。太っている人は痩せられるけど、身長は自分の意思じゃないでしょう」

「松坊が気にしないんなら、問題ない。つきあっちゃえ」

話が棒高跳び。まだちゃんと誘われてもいないのに、なんでそこまで飛躍するの？

美緒は心の中で溜息をついた。

Encounters you 5

「おっ！篠ちゃん、どうした？きよろきよろして」

「頭に手え乗せんなっ！」

「ちょうどいい高さにあるんだもーん」

「今、『殺人が罪にならなかつたら殺す奴リスト』のトップ、おまえ」

「大丈夫。返り討ちにするから」

駅から会社に向かう道で、身長差約20センチのハイテンションな会話を後ろで聞いていたのは、龍太郎の「きよろきよろしている原因」だった。

挨拶、したほうがいいかな。でもなんだか楽しそうだし、声かけたら悪いかも。

スクランブル交差点の赤信号で前が立ち止まった時、美緒はやつと龍太郎に声をかけた。

「篠田さん、おはようございます。先日はどうも」

振り向いたのは龍太郎の連れ、すなわち藤原のほうが先だった。おつきい人！美緒がそう思ったのは一瞬で、比較対象が小さいのである。

「あ、おはよう。同じビルなのに、案外と会わないね」

「あたしの会社別館だし、フロアも違うじゃないですか」

話を聞いているような聞いていないような藤原は、隣に黙って立っている。信号が青に変わると、美緒は「お先に」と歩き出した。やはり早足だ。普段からそのスピードで歩いているらしい。

「今の、誰？」

藤原に聞かれ、龍太郎は簡単に「別館の三階にある会社の子」と説明した。

「ああいう色気のないのが好み？」

「知り合い程度だし」

「どうせ知り合うんなら、タイプの女の子がいいなあ」

だから、見た目はタイプなんだってば。あの邪気のなさそうな目とか、よく笑いそうな口元とか。

それを口に出して協力を仰ぐほど、学生じみてはいない。

「俺の場合、身長分ハンディだしなあ」

「そうか？頭も小さいし、バランスいいじゃん。俺は全方向かつこいいけど」

「じゃ、その腹をどうにかしろ。おまえも今日から階段使え」

「やだ。朝から疲れる」

女と間違われるのがどれだけ屈辱かなんて、フジには絶対わからない。

Encounters you 6

誘いのメールを打つこともなく、二週間が過ぎた。十一月も半ばである。そろそろ作業着の上に防寒ジャンパーが必要になる。

「おはようございまーす」

「毎日、朝から元気だね」

「それじゃ、毎日何の悩みもないみたいじゃないですか」

「あるの？」

「そりゃ、ありますって！カラ元気なんですよう。じゃ、お先にー！」

相変わらず早足で歩いていく美緒は、龍太郎と一緒に出勤する気はないらしい。律儀に挨拶を寄越すので、嫌われてはいないな、と判断できるのだが。

やっぱり、積極的に誘うしかない。

龍太郎は小さく気合を入れた。

美緒がロッカールームで着替えている時に、携帯が鳴った。発信者は「篠田龍太郎」だ。

「今晚、飲みませんか。」

ランチを一緒にとった後、何回かメールは来たが、誘われたことはなかった。

まさか、ふたりでって意味じゃないよね。

予定は何もないので、とりあえずその部分を確認する。

「都合は悪くないです。何人で行くんですか？
すぐに返信が来た。」

「じゃ、もうひとり連れて行きます。詳細は後程。」

「それでは、こちらから誘ってみます。」

龍太郎が盛大にコケたのは、言うまでもない。

「篠ちゃん、朝から何がつかりしてんの」

「フジ、今晚おヒマ？」

「あら？夜のお誘い？あたし、オークラのスイートじゃないと行かないわ」

「おまえとなんか、金もらったって行かねえ。今晚女の子と飲むだけ」

「行く」

気持ち良いくらいの即答だ。

ガードされてんのかな、俺とふたりだけじゃイヤだとかって。

美緒にガードしている気がないことは、龍太郎には見当はつかない。

ビルの別館の入り口で待っていたのは、ハーフパンツにニットコート的美緒と、淡い色合いのスカートに巻き髪の女の子だった。

「とりあえず自己紹介はあとにして、行こうか」

行き先は、何の芸もなくビルの近くの居酒屋である。男ばかりで行く時よりも、少し小綺麗な場所を選びはしたが。

席について、簡単に自己紹介をしあう。美緒と一緒にいたのは鈴森で、「いわゆる女の子」だのと龍太郎は思う。一方、美緒は藤原と龍太郎を見比べて、「外見が真逆で面白い」と思っていたりするのだが、双方それを口に出すほど分別がないわけでもない。

「松坊がお世話になってます」

「坊なの？松山さん」

「本人、自分の性別がわかってないようなところがあって」

美緒が唇を尖らせて、そんなことないものと呟く。

「やっぱり、かわいい。」

龍太郎の頬は少し緩んだ。

当たり前障りのない会話で座をもたせたあと、美緒が手洗いに立ったときのことだ。

「篠田さん、もしかして松坊だけを誘ったつもりだったんじゃないですか？」

鈴森が龍太郎の顔を覗きこんだ。

「あの子って普通じゃない鈍さだから、はっきり言わないとダメですよ。見かけは悪くないから、合コンなんかであきらかなアプローチかけられるんだけど、気がつきませんから」

「あきらかなアプローチって？」

「常に隣に移動してくる人っているじゃないですか。それを偶然だ

と本気で思ってるんですよ。松坊が興味示した話題を一生懸命に掘り下げる人なんて、『趣味が会う人がいて良かった』で片付けちゃう。話しこんでるな、これは上手くいくかな、とかまわりが思っても『終バスに乗り遅れるから』なんて連絡先教えないで帰っちゃうし。本人、悪気があるわけじゃないから始末が悪いんです」

藤原が笑い出す。

「それ、どう考えても拒否られたようにしか見えないでしょ」

「まあ、今日は鈴森さんとも知り合えたし。これからよろしく」

龍太郎は、とりあえず「アイドル顔」といわれる顔で笑ってみせた。

入れ違いで龍太郎が立った。

「仲いいんですね。全然タイプが違うように見えるのに」

美緒が藤原に話しかける。

「タイプが似てるからって仲がいいわけじゃない。鈴森さんと松山さんも違って見えるよ」

「松坊と同じタイプなんていないっ!」

鈴森が混ぜ返す。

「篠ちゃんはある見えて直情径行だからさ、同じタイプの人間とじゃ戦っちゃうんじゃない?」

「うちの会社、新入社員教育で2週間合宿するの。支店採用も合わせて、20人くらいで。まだ名前も知らない奴と同室でさ、当然性格なんかわからない状態じゃない」

うんうん、と相手ふたりは頷く。

「篠ちゃんって、女の子から見てもつつきやすいから、初めの頃は本当にアイドル状態で女の子に囲まれてたわけ」

鈴森が「あー、わかるー」と相槌を打った。

「で、その中にすっごい可愛い子がいたの。なんかね、連れて歩いたら自慢だぞみたいな子」

つまり、研修所でプちなハーレム状態だったのである。

「もちろん篠ちゃんが女の子に媚びてたわけじゃないし、却って困った顔してるのはわかってたんだけど、ひとりで女と仲良くしやがって、とか思う奴もいるわけさ。まして狙いをつけた子が、自分よりも篠ちゃんにべつたりで、面白くないわけ。はじめのうちって氣ばかり使って、本音なんか見せないから、篠ちゃんは見た目でずいぶん舐められてたし。しかも、研修の成績はやたら良かったしね」

藤原は話を続けた。

「距離感が学生の時のまんまの奴もいてね。そうすると、弱々しく見えて成績のいい篠ちゃんは『いじりたくなる』人なんだよね。男は四人部屋でさ、俺も一緒だったの。だからまあ、僻みの入った小さいイヤガラセは氣がついてて、それは我慢できる範囲だって踏んで、何も言わなかった」

「うわー、子供みたい」

「研修が明日で終わるって日にね、そのすっごい可愛い子が篠ちゃんに告ったって噂が流れたの。本当に学生ノリでしょ？彼女は支店採用の子だし、篠ちゃんはデマだって言ってるけど、真に受けたの

が彼女に気があった奴。同室でね、結構ガタイのいい奴なんだわ。それが夜になってから、酔っぱらった振りして篠ちゃんに絡むわけ。成績がいい奴はとか顔のいい奴はとか言って、頭小突いてみたり。篠ちゃんもはじめは相手してなかったんだけど、途中から顔色は変わってきてた」

「格闘？」

「格闘じゃ確実に負けるでしょ。体重が1・5倍の相手だし。でも、そうなるそこだったけど」

鈴森は面白そうに、美緒は複雑な顔をして聞いている。

「篠ちゃんが反応しないもんだから、相手はエスカレートしたんだね。『おまえ、性同一障害とやらで後付けで男になったんと違うか？』なんて、酔ってる振りはしてたけど素面だったね、あのセリフは」

「そんなの、両方に対して失礼じゃない！」

藤原がその相手でもあったかのように抗議の声を上げる美緒を手で抑え、話が続いた。

「それ、篠ちゃんがまったく同じこと言った。あいつが座り込んでる横に篠ちゃんが立った時、あいつは無意識に体格で威圧しようとして立ち上がったんだ」

もう、オチは見えている。

その時、藤原の頭に薄青いシャツの腕が巻きついた。綺麗に極まったヘッドロックの形になる。

「俺がいない時に勝手に俺の話してんじゃねえよっ！てめえはよっ！」

ギブ！と手を外させた藤原は結論だけを大急ぎで付け足した。

「あんな綺麗に入ったボディーブロー、はじめて見たね。その後、同じ部屋の奴とかたっぱすつ抑えるのが大変だった」

まだ伸びようとする腕を避けながら、藤原は笑った。

終バスの時間が、と美緒が言いだして、お開きにすることにした。美緒と鈴森に二千円ずつ出させ、残りを龍太郎と藤原で割り勘する。駅まで一緒に歩き、美緒が地下鉄の入口に入る前に龍太郎は呼びとめた。

「あのね、今度はふたりで会ってみたいんだけど。ダメ？」

はつきり主張しないと気がつかない、と鈴森のアドバイスに従ったのである。美緒と同じ路線の鈴森が、割って入る。

「ダメじゃないですっ！全然！松坊だけ誘ってやってください！」

それだけ言うと、美緒をひきずって地下鉄の階段を下りていった。

「なんで鈴森が返事するのー？」

「何？篠田さんがイヤなの？」

「そうじゃないけど、なんか意味合いがわかんなくて」

鈴森は溜息をついた。

「現時点で意味なんかない。ふたりで会って、どんな人だか確認しないと話がはじまらないでしょうが。生理的に受け付けないタイプならいざ知らず、顔も見たくないんじゃないでしょ？学生さんみたいに毎日会ってる内に気になってー、なんてのなら社内恋愛しかないわよ」

「社内でそう思う人なんていないもん」

鈴森は美緒に顔を寄せた。

「今のスタンスだと、あんた八十になっても処女よ」

八十の処女？そんなバカな。

「とりあえず誘われてみ？悪い人じゃなさそうだし、初心者向き」

「何の初心者？」

「いいから、言うこと聞きなさいっ！」

迫力の言葉に、思わず返事をする。

ま、いいか。別に会うくらい。

「今日は付き合わせちゃって悪かったな」

駅の上にあるビルに入った店で、龍太郎は藤原に礼を言った。もう一杯だけ飲んでいこうか、と寄ったのだ。

「いや、女の子たちはそこそこ可愛かったし、楽しかったわ。松山さん、手強そうだけど」

「んー・・・ちよっとわかんない子だね。ま、ぼちぼち行ってみるよ」

願わくば、容姿について何も言われませんように。

龍太郎君よりも背が高いから、ヒールが履けない。龍太郎君を弟と間違われるから。お化粧したら私よりも綺麗なんじゃないかって言われた。腕も足も私より細いじゃない。サラサラの髪、女の子みたい。指輪のサイズがメンズじゃないんだね。服と一緒に選びたくても、売っている店が見つからないんだもん。

全部、俺のせいじゃない。高いヒールを履いちゃイヤだなんて言ったことはないし、細い髪だって伸ばしたことなんかないんだ。

begins to move 1

相手の興味がどこを向いているのかわからないときに、映画や美術館は危険だ。趣味がまるで違う場合、どちらかがしらけてしまう恐れがある。できれば水族館か博物館——話題がなくても、目の前のものを眺めれば良いのだから。

——サンシャイン水族館のチケットがあります。今度の土曜日にどうですか。

チケットがあるのは、嘘じゃない。新聞の勧誘員が置いていったから、と藤原に譲られた。すぐに返信は来ないだろうと龍太郎がポケットに携帯電話を落とした時、着信音が鳴った。

——行けます。時間等お知らせください。

時間等お知らせください・・・仕事の返事じゃないんだから。

行けますって返信しちゃった！

携帯電話を握ったまま、発信しちゃったメールって取り戻せなかったかな、と考えているのは美緒だ。無意味に発信履歴を確認して、頭の中がジタバタする。

会って確認しないと、どんな人かわからないって鈴森に怒られるし。

自分への言訳が必要なのかも知れないが、何の言訳なのかは美緒にもよくわからない。とりあえず理解できるのは、龍太郎と会うこと自体がイヤなわけではない、ということだ。大体、イヤなのなら朝の挨拶なんかしない。

まずは友達からってね。考え過ぎんな、あたし！

そう思うこと自体が、相手を異性だと認めている証拠なのだが、美緒はそれに気がついてはいない。ともあれ、約束は出来上がった。

休日出勤の時と同じく、ジーンズにMA-1の龍太郎が電車に揺

られている頃、美緒は池袋駅にくつついて建っているメトロポリタンプラザの化粧室で、自分のいでたちのチェックをしていた。散々考えた挙句、「友達から」と念じてニットコートにジーンズだ。

しまった！篠田さんってあたしより足、細い！並んで歩くとあたしの足がっ！

・・・後の祭だ。

なんであたしを誘ってくれるんだろ。面白そうに見えるかな。

それも、今頃になってから浮かんだ疑問だ。いや、浮かばないこともないことはなかったのだが、龍太郎の容姿は、あまりにも情報の連想からかけ離れていた。「あーんなことやこーんなこと」をするようには見えないのだ。

よしっ！新しい友達と、水族館に行くわよっ！

かくして土曜日の午後一時、池袋駅の「いけふくろう」前から、ようやっと話が動き出すのである。

begins to move 2

混雑するサンシャイン通りを並んで歩き、サンシャイン60の奥のエレベーターに乗り込むまでの美緒は、どう見ても挙動不審だった。やたらキョロキョロしているかと思えば、龍太郎の横顔の気配を伺っていたりする。

やっぱり気が進まなかったのかな。

会ったばかりでそれを聞くのは、何かおかしいような気がする。つられて龍太郎まで挙動不審のまま、水族館の入口に辿り着いた。

ポケットからチケットを取り出し、入場口を通して進もうとした時、龍太郎のMA-1の裾が引つ張られた。

「チケット代、払います」

何を言い出されたか理解できず、龍太郎は美緒の顔を凝視した。大真面目である。

「えつとね、松山さん？」

「はい」

「チケット、タダ。新聞の販促品。だから払ってもらうものはないの」

「はいっ！」

そこで、やつと思いがたることが浮かぶ。

もしかして、緊張してるとか？まさか。はじめて会ったわけでもないのに。

自慢にもならないが、龍太郎とふたりで歩いて、女の子が緊張するなんていう事態は、中学生頃の小柄さが目立たなかった時期だけだ。その後、まわりの友人たちが男臭くなるにしたがって、女の子たちは龍太郎を警戒しなくなった。姉がいるので、女の子と話すのに構えたところがないのも一因かも知れない。

「魚見る前に、ちよつと座ろうか」

アシカショーの時間にはまだ間があるらしく、吹きさらしのイベント会場で龍太郎は暖かい缶コーヒーを美緒に渡す。美緒はおとなしく受け取って、両手で缶を握った。

なんで水族館に入ってすぐにお茶？あたし、何か失礼なことした？失礼なことをしたかという発想そのものが、どこか間違っているのだが、それ以外に考えることができない。

「魚、見に行かないんですか？」

「その前に、ひとつ提案。イヤだったら拒否権発動してね」

龍太郎は隣に座って腰を屈め気味にして、美緒の顔をすくいあげるように上目で見た。

うわ、反則的にかわいい！

そう思う美緒の表情を確認しながら話します。龍太郎だって生まれてからずっと、この顔とつき合って来ているのだ。女の子にウケる視線の使い方のひとつくらいは、知っている。かなり不本意ではあるが。

「仕事じゃないから、『松山さん・篠田さん』はイヤじゃない？友達をさん付けで呼ばないでしょ？」

そこで距離を縮めるつもりだった。

begins to move 3

龍太郎にしてみれば、大した提案ではないのだ。合コンの席ですら、隣の女の子は名前で呼ぶのだから。にもかかわらず。

俺、何か慌てさせるようなこと、言った？

「だって篠田さん、歳上じゃないですかっ！」

「二歳くらい、誤差のうちでしょ。見逃してよ」

えーつとあの人、なんて呼んでたっけ。

美緒は記憶の中から引っぱり出す。

「・・・篠ちゃん？」

「却下。そう呼ぶのはフジだけだし」

それってつまり、名前で呼べってこと？

高校卒業以来、合コンの後のお茶程度を抜かすと、プライベートで男と一対一で出歩いたことなどないのだ。名前で呼べなんていうのは、あまりにもハードルが高すぎる。

鈴森のバカっ！こんなこと想定外だよっ！

「松山さん？何か気に障った？」

龍太郎が声をかけた時、美緒はふっと自分なりに正気に戻った（つもり）らしい。

自分のことは名前で呼べって言うつといて、あたしは「松山さん」

？それって、なんて言うか。

「不公平っ！」

意味の理解できない龍太郎の視線が、美緒の顔の上で止まった。

「あたしに『篠田さん』って呼ぶなって言うつといて、あたしを『松山さん』は不公平じゃないですか」

つい何秒か前まで困った顔をしていたくせに、真面目な顔で主張する美緒はやけに堂々としていた。

やっぱりこの子、なんかすっごくヘン！

腹の底から浮いてきた泡が、抑えきれずに笑い声になった。

「あたし、何かおかしいと言いました？」

「おかしくないです。そっちが正しい」

笑いがおさまらないまま、龍太郎は片手で詫げる。

「龍太郎でも、龍ちゃんでも龍君でもいいです。呼びやすい呼び方で」

そう言いながら、ベンチから立ち上がった。美緒もつられて立ち上がる。

「じゃ、中に入ろうか、美緒ちゃん」

「はい、えーっと・・・龍太郎さん」

美緒にしては精一杯頑張ったつもりだったのだが、すぐに訂正が来た。

「龍太郎さんって呼ばれると、なんかすごく年寄りになった気がする。せめて、君にして」

「だって、あたし目下だし」

「だから、そこは見逃してよ。頼むから」

融通、皆無？

begins to move 4

さつきから、どうもドツボな気がする。何で笑われなきゃならないの？あたし、変なこと言っていないよね。

目の前の水槽を眺めながら、表情に困っているのは美緒である。

水族館は好きだ。熱帯の華やかな魚も、北の暗い海も好きだ。

だけど——ねえ？また、笑われる気がする。

龍太郎が笑おうと待ち構えているわけではない。逆に隣の顔が綻ばないので、どうフォローしようか思案中である。

明るいフロアでアマゾンの魚を見ていた時に、美緒は突然話しはじめた。

「アロワナとかガーとか、ペットショップで売るのがって犯罪だと思いませんか？」

「はい？」

アロワナはわかる。目の前に泳いでいるから。ガーとは何ぞや？「売ってる方は大きくなるスピードを知っているのにそれを言わないし、買う方は研究もしないで買う」

水槽の中のアロワナを目で追いながら、龍太郎は美緒の話を聞いていたが、知らないものは理解できない。

「ごめん。まずガーってのが何だか説明してくれる？」

古代魚・ワニみたいな顔してます。興味があつたらググってください

ものすごくしっかり理解できたことはある。やっぱり緊張しているということ。

柴犬だ。かわいくて頑丈で、意外なほど警戒心が強い。

笑ってはいけない。

柴犬の性格っていうのは、飼い主の育て方に左右されるのである。

飼いたいっ！とか思っても、責任を持って育て上げる覚悟がない者は、飼ってはいけない。まあ、動物全般すべてについて然るべきではある。今、龍太郎の目の前には、龍太郎とほぼ同じ程度の体格の柴犬が、首輪も付けずに自分の方を窺っている。

何故、誰にも飼われていないのだろうか？

答えは簡単。犬と違って現金売買されないからだ。そして、犬と違って飼い主を選べるからだ。

あたし、なんか今の発言、すつごく唐突だった気がする！

美緒の頭は、またジタバタしはじめる。何か話さなければ、と思つて出た言葉だったのだ。

友達！友達！新しい友達だってば！落ち着け、あたし！

何もここで「あーんなことやこーんなこと」の展開があるわけはないのだ。美緒は龍太郎の横顔に、ちらりと視線を走らせる。色白の顔にサラサラした髪。でも、足の運びも手の仕草も女の動きとは違う。仕事上のやりとりではなく、楽しみや感情を今交流しようとしている人は――

「美緒ちゃん？水族館嫌いだった？」

「いいえっ！水族館、大好きですっ！楽しいですっ！」

考えんな、あたし！

begins to move 5

水族館を一周回って、外に出た。まだ夕方とも言えないような時間だ。

「展望台にでも行く？高い所、怖い人？」

「高い所は大丈夫です。ナントカと煙は・・・って言いますけど」

「俺もそのナントカのクチだ。今度は東京タワーにでも行こうか」

「大観覧車がいいな。葛西の水族館も好きです」

とりあえず、もう会いたくないとは思われていないらしい。

展望台の入り口で、また財布を出そうとする美緒を制して、龍太郎が先に立つ。

「だって、はじめて会った時からお金出してもらいっぱなしで」

「年下のかわいい女の子には、見栄くらいはりたいもんです」

臆面もなくこんなこと言えちゃう人なんだ。かわいいって言うてる本人の方が、あたしよりよっぽどかわいいのに。

「いつから、あたしの顔知ってました？」

美緒が『たぬきや』にひとりで入った時、龍太郎は確かに美緒の顔を知っていた。会釈したのだから。

「昼休みのエレベーターに乗り合わせたことがあるんだよ。美緒ちゃんか『たぬきや』に行きたいって主張して、他の人たちにダメ出し喰らってた」

いつのдарう？年がら年中のことなので、美緒はまったく記憶にない。

「とにかく、その時に顔を覚えたわけ。で、面白そうだなと思って」

「面白いですか、あたし？」

「まだわかんないね。ちゃんと話してもいないし」

そこで話を切って、龍太郎は窓の外を眺めた。

まだ、ちゃんと話してもいない。気が合うかどうかなんて、わからない。「とりあえず、誘われてみ？」という鈴森の声が聞こえてきた。

あたしって、その部分を飛ばして来てたんだ。つきあっちゃおうか、なんて言葉ばかり気にして。

美緒は息を吸い込んで笑顔を作ってから、龍太郎の横に立って窓の向こうに目をやった。

「そうですね。よく知らない人と友達にはなれませんが。龍太郎君、よろしくお願いします」

「はい、よろしく」

女の子にわざわざ声かけて、デートの段取りするのが「友達」か？美緒と一緒にいた女友達（名前は忘れた）の「すごい鈍い」がどこから来たのか、龍太郎は身をもって体験したのだった。

龍太郎が風呂から出ると、携帯の着信ランプが光っていた。

「今日はありがとうございました。楽しかったです。」

下着のまま冷蔵庫を開け、牛乳パックに直接口をつけて飲む。返信しようと携帯を握りなおしたら、追加が来た。

「なんだか緊張しちゃってて、すみませんでした。また誘ってください。」

夕食には誘わず、お茶だけ飲んで別れた。その頃にはずいぶん打ち解けた態度にはなっていたのだが、会社の近所で見るようなパワフルでよく笑いそうな表情には遠くて、可哀想になってしまったのだ。本当は、やはり気が進まないのに無理矢理出てきたんじゃないのかと思うほど、美緒の表情は硬かった。それが。

また誘っていいの？

社交辞令かも知れないが、そこは敢えて無視することにする。

だって、かわいいじゃん。何か喋るたびに、表情がくるくる変わって。

「じゃ、次の機会を考えます。希望はありますか。」

携帯に打ち込んで、送信ボタンを押す。

よし。とりあえず、繋がった。

篠田さん、つまらなかつたんじゃないかな。

今更気に病んでいるのは、美緒の方だ。気と金を使わせてしまった、という感覚だけがある。だから、「次の機会を」とメールが来た時の気分は、結構複雑だ。

あたしが篠田さんを「男の人だ」って意識しなくなるまで、どれくらいかかるんだろう。

意識しなくなるのは龍太郎の本意から外れていくことだと気がつく

には、美緒はスキルが低すぎる。

会社内で男の人と話すのは、まったく平気なのに。合コンで隣に座った人にも、緊張なんかしない。一対一だっただけでのあんなの、絶対どうかしてる。

美緒が母親と並んでテレビを見ていると、携帯が震えた。発信者は鈴森である。

—どう？上手く行ってる？

ヒマ人！

—展望台に行つて、お茶して帰宅。以上。

返信すると今度は通話の方の着信音が鳴った。

「ちよつと！ごはん食べるくらい、してないの？気に入らなかったわけ？」

「そんな話にならなかったもん。また今度つて言つたし」

何で責め口調で聞かれるの？しかも、あたし、言い訳口調だし。

「中学生のデートかつ！あんた、他のことは全部テンポ早いクセにつ！」

「別に遅くない。時期が来てないだけ」

「自分で時期を遅らせてんの。今まで気がつかなかっただけで、あんなに手え出したい人はいたの」

手を出される。つまり、自分の身の上に「あーんなことやこーんなこと」が起こる。それについては否定しない。否定はしないが、相手はもちろん選びたい。そして、その選ぶ方法は「相手を見る」ことだ。あれ？

「・・・会わないと、相手って選べないね」

「やっと気がついたか。遅すぎないから、篠田さんにしちゃえ」

話がまた棒高跳び。大体、「しちゃえ」と言われたって、向こうがそのつもりじゃなかったら、どうする。

彼氏だの彼女だのって決めてから相手を知るのって、やっぱり何かが違うのではないかな、と美緒はまた深く溜息をついた。

for the time being 2

「おはようございます。土曜日はありがとうございました」

美緒が追い抜いた後、のんびり歩く龍太郎の頭には、毎度の手が置かれていた。

「頭に手え乗せるなっ！」

「何？土曜日に一緒に出掛けたの？」

「出掛けたには出掛けた・・・ただ、なんつーか微妙」

「普通じゃない鈍さだつて言つてたもんねえ」

鈍いだけじゃないような気も、しないではない。

「松山さん、カタログファイル作つといて！。外科外来用、50セット」

美緒は言いつけられた仕事をこなすために、カタログ庫でカタログを集めていた。ストックがないのに気がつき、キョロキョロ探すと、スチール棚の一番上に乗っている。誰かが持ち出したらしく、手近に脚立が見当たらない。

大丈夫、誰もいない。

セミタイトの制服の裾を膝よりもかなり上に持ち上げ、棚によじ登ろうとした瞬間、ドアが開いた。

「松山さん、電話入ってます」

慌ててスカートの裾を戻す。

「ちょうど良いところに。大木君、一番上のサージカルテープのカタログ、降ろしといて」

入れ違いにカタログ庫に入った大木が、「色気ねえ・・・」と呟くのを聞いた。

あんたに見せる色気はないっ。

かと言つて、今まで色気を見せた相手はいないのだ。

「忘年会の会費の集金です」

龍太郎の席に回ってきた女子社員が、名簿にチェックしながら会費を集金していく。まだ12月は始まったばかりだ。

「二次会は独身だけでやるから、篠田君も参加ね」

につこり笑う総務課の彼女は、小柄なのに豊かな胸の持ち主で唇の印象的な女の子なのだが、龍太郎は苦手である。研修合宿の最終日に龍太郎に「告った」のは支店の女の子ではなく、実はこの女の子だから。それは、藤原も知らない。

つきあつて欲しいの。私なら、身長のとつりあいも取れるでしょ？身長のとつりあいで彼女を決めたことなんて、一度もない。身長と気が合う・合わないは関係ない。だから、そう言われたことがひどく屈辱的に感じた。彼女、つまり総務の三浦は、龍太郎に「背が低いんだからストライクゾーンが狭い」と言つたようなものだ。そんなことに拘つていたら好きな女の子とデートもできないことは、学生時代に学習済なのだが、逆に「女の子は身長に拘るのだ」と念押しをされたような気になった。

そして、断わつたにもかかわらず、三浦は龍太郎にちよこちよことアプローチしてくるのだ。

入社したばかりで女の子とつきあふ余裕はない、なんて言つたの、社交辞令だから！本気で好みじゃないから！

同僚という立場では、そんなに強い言葉では否定できない。距離が近くならないように気をつけるばかりだ。

for the time being 3

龍太郎が帰り電車に乗っていると、後ろから声をかけられた。

「篠田さん、どうも。この路線だったんですね」

顔を思い切り上げると、「エア・トラッド」の津田である。

「あ、こんばんは。そうですね、上板橋なんです。津田さんですか」
よく見ると隣に、龍太郎から見ても更に小柄な女性が立っている。
「母ちゃんです。子供が風邪引いて、保育園で預かってもらえないから、実家に預かってもらって。今から迎えに行くんです」

女性はぺこりと頭を下げた。

共稼ぎも大変だな、と顔を見る。それにしても、この夫婦の伸長差、どれくらいだ？

「篠田さん、現場の評判良いですよね」

意外な言葉を聞いた。

「頼りないとか思われてるんじゃないですか？」

「いやいや。管理がしっかりしてて、工程に余裕があるって設備屋さんが言ってますよ」

二年目にしては、結構な評価である。ガッツポーズをとりたいのを、抑える。見た目で舐められる分、他人よりも努力しないと信頼がついて来ない。業者からの信頼度を、外見のせいにしたくはない。入社後の部署が決まった時期に、文系の大学では縁のなかった設備のあれこれを、頭に叩き込んだ。

舐められてたまるか。

龍太郎の仕事の原動力は今のところ、その一言に尽きる。

「津田にも見習わせてくださいね」

津田の隣の女性が口を開いた。

「いいな、外見がスマートで仕事ができるの。うちの子供もそうや

って育つといいけど」

「チビですよ？」

「背なんか高くたって嵩高いだけで、電球換える時くらいしか役に立ちません」

「きつつ！」

「実際、一緒に過ごして快適なら、関係ないでしょう？」

自分が好ましいと思える女性が、そう思ってくれればいいんだけど。

津田夫妻に手を振って電車を降りた。現場の評判が良いという言葉が、やけに自分を高揚させる。携帯電話を取り出して、アドレスを呼び出す。

— こんばんは。近いうちに夕食をどうですか。

えーっと、夕食？向かい合って食事する。いや、最初に会った時は確かに向い合せて食事した。だけどあれは、成り行きっていうか。美緒が携帯を覗き込んでジタバタし始めたところに、鈴森が顔を見せた。

「松坊、そろそろ残業終わる？・・・って何赤い顔してんの」

「えっと夕食！じゃなくって！残業、終わるっ！待っててっ！」

「別に慌てなくても」

そう言いながら、美緒の握りしめた物に目を留めた。

「デートのお誘い？」

隣の席で、大木が顔をあげたのが見えた。

「今行くから、ロッカールームで待ってて！」

美緒は慌てて机の上を片付けて、PCの電源を落とした。

「別に、いきなりホテルに誘われたわけじゃなし。やだやだ、年齢不相応女は」

「いや、だって、この前緊張しすぎて、なんかヘンな人だったし」

「彼のどこに緊張する？顔は良いけどさ、この前飲みに行った時も普通の人だよ？却って優しいくらいじゃない？」

うん、水族館を出た後も、居心地が悪くならないように話を繋げてくれたのは理解してる。

「言っちゃ悪いけど、男の匂い薄いし。そういう意味でも緊張は薄いと思うんだけど」

あ、なんか違和感。なんだろう。

事務服をロッカーに入れながら、美緒は違和感の正体を探る。鈴森が今言ったこと。男の匂い薄い、だ。

「男の人だよ？」

「そりゃ、性別は男だろうけど。あの体格とあの顔じゃ、スカート穿いても違和感ないでしょ」

「女には見えないと思う。歩き方とか喋り方が女じゃないもん」

美緒がそう言うのを鈴森は驚いた顔で聞き、しばらく考えてから断固とした口調で言った。

「松坊、緊張してもいいから、篠田さんと一緒に食事でも何でもしておいで」

「なんで？」

「なんでも。今、ここで返信しちやいな。ロビーで待ってるから」

あの考えた時間はなんなのよ。断る理由はないから、行くけどさ。行くけど。

―木曜に会議があるので、できれば金曜がいいです。返信をしばらく待つ。

―忘年会シーズンだから、金曜日は無理でしょう。土曜はこちらが仕事ですから、日曜のランチでどうですか。

コートのボタンを留めながら、鈴森の待つロビーに向かって歩く。うわ、2週連続で待ち合わせて、なんだか・・・

let fall to you 1

日曜の朝、化粧を始めた美緒は急に気が重くなった。休みの日にわざわざ電車に乗って出掛けても、共通の話題なんかない。

ああ、でも誘ってくれたんだ。この前のあたしが、あんなにつまんないヤツでも。あたしのどこを気に入ったのか、わかんないけど。普通なら、友達になるのに手順なんかいらない。気が合いそうだと思えば、連絡を取り合えば良いのだ。面倒だな、と美緒は思う。実を言うと「つきあってる関係」っていうものに、興味はある。

高校生の頃にいた「彼氏らしきモノ」とは手を繋いで遊園地にも行ったし、校舎の裏でこっそりキスしたりした。でもあれば、学校という括りの中で一番恋愛に近い男の子だったただけだと思える。その証拠に卒業してから少しずつ疎遠になって立ち消えた時、繋ぎとめようという気もなかったではないか、と美緒は考える。

少なくとも、あたしに興味があるんだよね。だから、あたしがどんな人間なんだか向こうだって見極めたい筈。話は全部それから。

美緒は小さく気合いを入れて玄関を出た。

上野って、動物園と美術館しか知らないんだけど。

大パンダの前で携帯を弄りまわしながら、龍太郎は思案に暮れていた。美緒の交通の便を考えての場所の選択だったが、中学校の時のフィールドワーク以来、上野に来たことはない。知っているのは西郷さんの場所くらいものである。ちょっとくらいリードしたいところだが、土地鑑ゼロだ。

ま、どうにかなるでしょ。無人島じゃないんだから。

先程パンダ橋から見ただけの上野の街は、ビルばかりに見える。上野の山の中にあるのは、動物園と美術館の他になんだろう？

知らねえ。俺、イナカモンだし。

龍太郎の実家は龍太郎の住む路線の奥の方なので、生活圈が違っ

だけなのだが。

「ごめんなさい。遅れましたか」

「遅れてません。時間前ですよ」

龍太郎が美緒に向き直ると、ほっとした笑顔が戻った。

「篠田さんが先にそこに待ってるのが見えて、焦ったんです。待たせちゃったかと思って」

龍太郎も笑顔を作ってから、言葉を発した。

「罰金」

「なんで？」

「篠田さんじゃないでしょ？」

あ、と気がついて、きまり悪そうになった美緒の顔は、妙に子供のようだった。

「その顔がかわいいから、いいや。次から五千円」

「高っ！」

「お財布に痛ければ、忘れないでしょ？」

「篠田さんが間違えたら、私が罰金もらっんですよ」

「はい、罰金」

「だめっ！次からっ！」

大丈夫、先週よりも話しやすい。

会話の呼吸がずいぶんと楽になっていいることに、龍太郎と美緒は同時に安堵した。

let fall to you 2

「誘つといて悪いんだけどさ、俺、上野ってまったく不案内なんだよね。行きたい場所、ある？」

「あたしもトンカツ屋とアメ横の中しか知りません。探検してみます？」

アメ横・・・著しく色気に欠ける場所である。未だに闇屋を連想させる小売店が軒を連ねているのは、龍太郎だってニュースで見たことはある。年末であるために人通りが多いのか、それとも普段からなのか知らないが、やけにゴミゴミしている。

とりあえずローストチキンの店に腰を下ろすことに決め、向かい合わせに座る。

「本当は、もつ煮の店なんか行ってみたいんです。女同士だと行きにくいし、ひとりだともっと勇気がいるし」

「じゃ、今度はそれにしよう」

あ、今度って言った。

美緒は胸の中で呟く。この人は不自然なく「今度がある」思っているんだろうか。

「美緒ちゃん、このあと時間は大丈夫？」

そう聞きながら、龍太郎は美緒の表情を探る。不愉快な要素があれば、ここで「予定がある」と帰ってしまうだろう。

「時間があれば、動物園と美術館以外の所に案内して欲しいんだけど」

「私も知っているのは、それプラス博物館くらい」

「じゃあ、そこ。アカデミックしよう」

席から立ち上がり、伝票を手取る。

「払いますっ！」

「カラダで払う？」

普通のやりとりのベタな冗談だ。上司に言われたって、セクハラだなんて言わずに切り返せる。なのに。

Bomb! 弾けた顔色に一番驚いたのは美緒自身で、口元を押さえたまま、一度立ち上がりかけた椅子に再び腰を落とす。

「・・・美緒ちゃん？」

肩に置かれた手に、美緒はますます顔が上げられなくなった。

まずいつ！高校生じゃあるまいし、こんな冗談を聞き流せないほど純情じゃないっ！

「ごめん、こういうジョーク、ダメだった？」

予想外の美緒の反応に、龍太郎は慌てた。

「謝るから、顔あげて」

悪くない人に謝らせちゃいけない、と美緒は焦る。

「篠田さんのせいじゃありませんっ！」

慌ててあげた美緒の顔は耳まで朱の色で、視点の定まらない涙目だ。

「なんか、違うツボに入っちゃったみたいで。やだもー、なんでえ？」

もう一度頬を押さえて下を向く美緒を見下ろして、龍太郎は肩に置いた手を引っ込めた。

やばい。今の顔でやられちゃったかも――

龍太郎がそう思っても、美緒はもちろん気がつかない。

「篠田さんじゃないでしょ、罰金」

・・・頼むわ柴犬、もう少し懷いてくれ。

l e t f a l l t o y o u 3

国立科学博物館の中は、意外に混雑していた。いくつかに分かれた館内は、方向を見失うと何を見ていいのかわからなくなる。

「博物館に来たら、恐竜の骨を見なくちゃ気が済まない」

そう言う美緒に従って、龍太郎は勝手のわからない館内を歩く。

どうも、大きな生物が好きらしいと見当がつく。

大きな生物・・・ダメじゃん、俺！

フロアマップを片手に動き回り、屋上のハーブガーデンに到着すると夕暮れ近かった。

「あ、残念。お天気の良い昼間だと、あっちがわのソーラーパネルが全開で綺麗なんです」

「じゃ、次はそういう時に来よう。そろそろ閉館でしょ？」

閉館30分前だ。

「西郷さんの方でライトアップしてるみたいだから、見に行かない？時間、大丈夫？」

中学生にだって早い時間だ。

「大丈夫です」

暗くなつた上野公園の中を、並んで歩く。「恋人たちの森」と銘打ったイルミネーションを辿って見ている親子連れやカメラマンに混ざって、カップルも目立つ。前を歩くカップルに、龍太郎はふと目を留めた。男が女の肩を抱き、女は男に凭れ掛るように歩いている。

あれ、俺はできないんだよな。

龍太郎の身長と腕の長さでは、女の肩に腕を回すと必然的に顔が自分の真横に来てしまう。

大きいものに寄りかかる安心感が、俺にはない。

そう思うだけで暗澹たる気分になるのは、過去のいくつかの失恋の

理由だったからだ。

動物型のイルミネーションにはしゃいでいた美緒は、隣の雰囲気
が重くなったことに気がついた。

「篠田さん、どうかしました？」

「・・・罰金。俺、馴染みにくい？」

「そうじゃないんです。慣れなくて」

イベント会場で立ち止まるには、妙な雰囲気になった。

「慣れないって？俺に慣れない？」

「じゃなくって」

これを言ったら、他の意味に取られるかも知れない。でも、他に
表現のしようがない。

「男の人とふたりで出歩くことに慣れないんです」

男の人。その言葉に慣れないのは龍太郎だ。今まで中性的だの可愛らしいのと散々言われ続けて、それを修正するために必死だった。この女の子は、まだそんな部分など見てもいないのに、自分のことを「男の人」だと言うのだ。一番のコンプレックスは、この子に意味を持っていなかった。

やられた。

龍太郎の沈黙が何を意味しているか、美緒はもちろん知らない。

let fall to you 4

何で黙っちゃうの？ やっぱり言っちゃダメだった？ 男の人とふたりに慣れない、なんて高校生みたいだもの。呆れたかも知れない。

黙ってしまった龍太郎に話しかけることもできず、美緒はやはり黙ってイルミネーションを見ていた。立ち止まったままだと、十二月の日暮れ後は寒い。何かへまをしたのかもしれないと気が気ではないのだが、自分の言葉を反芻しても、龍太郎自体を貶めた言葉を使った訳ではなく、沈黙の意味がわからない。

「そろそろ、冷えてきませんか？ 場所を移動しましょう」

美緒がやっと掛けた言葉に、龍太郎ははっとしたように顔を上げた。

「ごめん、ばーっとしてた。軽く何か食べようか。さっき言ってた、もつ煮つてところに行く？」

あたしに対して不機嫌なわけじゃないんだ、と美緒はほっとする。少なくとも、すぐに帰ろうと言わないのだから、気分を害しているのではない。

「駅ビルに何かあります。そちらの方が、動きやすいです」

「じゃ、そうしようか」

並んで歩き出すと、会話が戻ってきた。

「好き嫌いはある？」

駅の中にあるハードロックカフェに入り、軽い夕食にした。美緒が頼んだのはピザだったのだが、途中で龍太郎に「シェアしてください」と言いはじめた。

「どうしたの？ 『たぬきや』の鮪丼を食べる人が」

「入らなくなっちゃって。どうしたんだろう」

困ったように美緒は小さな声で言った。

「具合悪い？歩かせたから、疲れちゃったかな、ごめん」

「違います。それは楽しかった。篠田さん・・・じゃない、龍太郎君も疲れたんじゃないですか？」

慌てて言い直した表情がかわいいと思い、龍太郎の表情は和んだ。「俺は男だし、仕事も現場が多いからさ。名前、やっぱり呼びにくい？無理しなくていいや。ゆっくり慣れて」

こんな顔するんだ！

美緒を覗き込んだ顔に浮かんでいるのは、やわらかくて懐かしい大人の表情だ。どきん、と心臓が大きな音を立て、美緒の視線は龍太郎の顔の上で止まった。

「美緒ちゃん、やっぱり疲れちゃったんでしょう。帰ろっか？」

正しく割り勘して駅の改札から一緒に入り、美緒を常磐線のホームまで送った。

「また、誘っていいかな」

龍太郎の確認するような視線を避けるように、美緒は俯いた。

「楽しかったです。メールしてください」

手を振って階段をのぼる龍太郎を目で追いながら、何故視線を返さなかったのかと美緒は後悔していた。

会社の忘年会ほどつまらない場所はない、と美緒は思う。仕事の中のお茶汲みが当然のように、上司にビールを注いで歩くのが当然の社風なのだ。

会費払って酌して歩いて、気がつくとお料理が冷え切っちゃってる。オジサンのくだらないジョークに笑ってやらなくちゃならない。バカバカしいったらありやしない。

二次会へという言葉を通して、鈴森とお茶を飲んで愚痴を言い合ってから駅に向かう時、前に見知った姿があった。

「あれ？そっちの会社も忘年会だった？」

藤原に声をかけられ、美緒はその隣を探す。常に一緒にいるわけじゃないのだが。

「二次会パスして、お茶飲んで今帰ります。藤原さんは？」

答えたのは鈴森が先だ。美緒がきよろきよろしているのに気がつき、藤原は美緒に向かって言った。

「篠ちゃんなら、今から三次会とかつてあつちで捕まってるよ」

親指で藤原が指し示した方に、紺のダッフルコートの龍太郎が見える。その横にはピンク色のコートの、ずいぶん小柄な女の子がいる。龍太郎の肘に手をかけ、なにやら一生懸命話しているように見える。栗色の髪に縁取られた顔は、「まさに女の子」だ。相手をしている龍太郎の苦笑いも、親しげに見える。

なんか、やだ。

この女、さつきから常に横にいて鬱陶しい。

そう思っているのは、龍太郎である。総務の三浦のことだ。気がつく、横の席にいる。仕事の話をしていても、「お酒の席で仕事の話はやめましょーよー」と突っ込んでくる。そして今、「気が合

う人だけ誘って三次会に行きません？」と肘に手を置いているのだ。気、合わないから！語尾伸ばす喋り方するヤツ、嫌なんだってば！邪険に振り払うこともできず、頼みの綱の藤原は「篠ちゃんが行くんなら合わせる」と良い気分には酔っ払っている。

「フジとふたりに飲みたいから、また今度ね」

手を離させて藤原に近づくと、美緒と鈴森が一緒に立っている。龍太郎はほうつと息をついた。

「美緒ちゃんたちも忘年会？」

そう言ったところで、後ろから三浦が後ろから追ってきた。

「篠田君、冷たあい。藤原君も一緒にいいからあ」

藤原君も一緒に「で」って何だ「で」って！

龍太郎が仕方無さそうに藤原に「行くか？」と声をかけるのを、美緒はじつと見ていた。

なんか、すつごくやだ。

「終バスがなくなっちゃうから、失礼します」

そう言いながら美緒がその場から動いた時、後ろから声が聞こえた。

「知ってる人お？」

むか。知らない人じゃないもん。

「篠田さん、今度ついていつにします？メール待ってますから」

振り向きざまに美緒が投げるように言った言葉に龍太郎は一瞬目を見開き、鈴森は硬直し、藤原は笑い出した。

「明日、メールする。気をつけて帰って」

一番最初に立ち直ったのは龍太郎だった。

何言ったの、あたし！

逃げるように早足で歩き出した美緒に、鈴森が走って追いつく。

「松坊！どうしたの？なんか捨て台詞チックだったけど」

わかんない。多分、今一番びっくりしてるのは、あたし自身だ。

Unconscious act 2

振り切れずに女の子が何人か混ざってしまった三次会で、龍太郎はゆつくりと美緒の言葉を反芻することもできずに不機嫌だった。

「篠ちゃん、今日泊めて」

「男と寝たくねえ。神奈川の奥地に帰れ」

そう言いながら、藤原と連れ立って電車に乗る。同じ方向の女の子が一緒だ。龍太郎の家の方が三十分程会社に近いので、帰りが遅くなると藤原は泊っていくことが多い。ハブラシとカップとLサイズのスウェットが部屋にキープしてある。

「ま、明日は休みだから、もうちよつと飲むか」

「泊めてもらうけど、襲わないでね？」

女の子が笑い出す。

「どう見ても、逆っ！藤原君を篠田君が食っちゃう方でしょ」

「だって篠ちゃん、肉食系なんですもの。あたしの貞操が危機なのよ」

藤原の道化た口調は、女の子を更に笑わせた。

「無理無理無理っ！篠田君の可愛さに藤原君が血迷うほうが先っ！」

そうだよな、普通みんなこっという反応するんだ。大学生の頃なんて、女の子が平気で俺の部屋で雑魚寝したもんな。龍君の家なら平気ーとかって言うて。

カラダで払う？と聞いたときの真っ赤な顔。男の人と一緒にいるのが慣れないと言った時のきまりの悪そうな顔。今まで自分に向けられなかったものが、いきなり目の前に現れたのだ。それが欲しかったのだと改めて自覚してもおかしくはない。声高に主張しなくても、自分の形を認めてくれる存在。自分が女の子受けするのは、確かに知ってる。みんな警戒しないで寄ってくる。だって、警戒する要素は薄いんだから。

今度つていつにします？今でもいい。

なんであれに不機嫌になったんだろう。

なかなか眠りが訪れないベッドの上で、美緒は自分の感情を反芻する。

ダッフルコートが、似合ってたのよ。お休みの日に会うMA-1じゃなくて、紺色がやけに目に付いて。それに寄っていたピンクのコート。あたし、あんな風に女の子だって主張するようなモノ、着てない。紺とピンクのコンビネーションが綺麗で、それが何か嫌だったんだ。

捨て台詞のような響きになったのは、自覚していた。そんな口調を残した自分がヘンで、嫌だと思った。まだ何かはじまるのかどうか、自分でも理解していないのに、「なんかやだ」であんな風に言うってしまった。

篠田さんが、怒ってたらどうしよう。

また冴えてくる目を無理矢理閉じて、美緒は身体を丸めた。

Unconscious act 3

龍太郎はその晩、結局明け方まで飲み続け、翌日藤原と共に目覚めたのは昼過ぎだった。お互いに炬燵に足をつっ込んだまま寝たので、身体中が乾燥している。キッチンで水を汲み、一息に飲む。頭いて・・・

「篠ちゃん、朝メシ・・・」

「朝じゃねえ、昼も過ぎた」

藤原は更に酔いの残った顔である。

「どうせだったら女の子の家に泊めてもらって、朝のコーヒーで起こされたい」

「人の家に泊まつといて、勝手なこと言うな。コンビニでも行くか？」

「俺、スウェットに革靴なんてヤダ」

「いいけどさ。買ってきたものに文句言うなよ」

踵をつぶしたスニーカーを引っかけ、顔も洗わないままコンビニに向かつて歩く途中、龍太郎は昨晚「メールする」と言ったことを思い出した。

なんか怒ってた？俺に？朝、挨拶をしたときは普通だったぞ？

おにぎりとおペットボトルのお茶を適当に掴み、カウターの上の揚げ物も買ってアパートに戻る。部屋に戻ったら、メールをしようと思う。

明日じゃ早いか。年末だから、平日の帰り時間は読めないし。

一方、美緒も起き上がったのは昼過ぎだった。

「イイ年の娘がいつまで寝てるの！」

母親に布団を剥がされて、いやいや身体を起こしたのである。着替えて、とりあえず洗濯機を回してから、コーヒーを淹れる。ボー

つと座っていると、母親が前に座った。

「休みの日だからって、そんなに気の抜けた顔して。ちょっとは娘らしいことのひとつもしなさい」

娘らしいこととは、何？

聞き返すとうるさいので、いい加減に返事をする。男の子なら男らしいことのひとつも、と言うのか。家の中には高校生の妹がいるのみなので、わからない。

そう言えば、メール！今日メールするって！

慌てて携帯をチェックすると、着信はなかった。

Unconscious act 4

午後二時を過ぎても、龍太郎からのメールはなかった。溜まったアイロンがけをしながら、美緒の目は携帯に向いたままだ。すべて済ませた三時過ぎ、クローゼットに仕事を終えた服を納め終わった頃に携帯が震えた。通話ではないのに、慌てて開く。

「すっかり二日酔いしてます。来週の晩、仕事が早く終わりそうな時に連絡します。」

あ、やっぱり三次会に行ったんだ。あのピンクのコートと。女の子の子してて、男の子に人気のあるタイプだね。

今しがた開いたばかりのクローゼットの中身を思い浮かべる。色味もそうだが、全体的にあっさりしすぎな気もする。フレアのスカートやモヘアのニット、レースのカーデイガン、それは美緒のワードローブに含まれていない。「性に合わない」と退けていたから。

美緒は上着を羽織りリュックを背負って、車庫から自転車を引き出す。

「美緒ちゃん、どこ行くの？」

妹からの問いかけに「ボックスヒル！」と駅ビルであるファッションビルの名を言う。何が買いたいのか自分でもわからないが、自分のワードローブがひどく不足している気がした。

「何、松山さんにメール？」

コタツの天板に顎を乗せたまま、藤原は龍太郎に話しかけた。ん、と龍太郎は曖昧に頷く。

「昨日、三浦に対抗してたもんねえ。三浦もいい加減、相手にされてないの気がつけばいいのに」

それに対しては、答えなくておく。三浦から直接的な言葉をかけられたのは研修の時だけで、その後は横をウロウロしているだけな

のだ。

「松山さんって確かにかわいいけどさ、色気に欠けるっていうか女っぽくないっていうか」

「放つとけ。フジが去年つきあってた女だって、色っぽいのは身体つきだけだったじゃん」

「巨乳はいいぞお。三浦の胸も捨てがたい」
捨てがたいんなら、捨つてもいいぞ？

美緒からの返信はすぐに来た。

「今週中なら、前日に言っていただければ時間を空けます。」

三浦に対抗したのか、ただ虫の居所が悪かっただけなのか、とりあえず了承の言葉だ。年末に時間のやりくりは難しいが、どうにかしなくては。

だって、やられちゃったから。

「元気で明るいイメージで、こんな感じでいかがですか？」

「えーっと、そういうのは普段から・・・ちよつとイメージが違うものを・・・」

しどろもどろ。もともと何が欲しいというわけでもないのだ。頭にあったのは、ピンク色のコートと白いブーツだ。女の子にしか樂しめない服装を、してみたくなった。会社に行けば制服があつて、通うだけならばジーンズでも問題ない。だから服装つていうのは、趣味オンリーの話だ。雑誌の特集の「モテ服云々」を、美緒は今までバカにしていたのだ。不特定多数にカワイイと思われたいなんて浅ましい気がしない？ 散々そう言った気がする。

違うつつ！「誰にでもかわいく見える」って「誰かにもかわいいと思ってもらえるかも」ってことだ。

ビルの中の店をウロウロしながら、美緒は考える。

・・・誰かつて、誰？

色白の小造りな顔に大きな瞳と褐色の髪で、指も足もあたしより細い人。ダメだ、敵いつこない。あれよりかわいいだなんて・・・ん？ 何か、ヘン。

ジューススタンドでストローをくわえてから、美緒はやつと自分が混乱していることを認める気になった。混乱の理由は、おぼろげに理解できている気もするのだが、今は考えたくない。

帰る。こんな日は、絶対ロクな買い物できない。何も買わないで帰るつてのも癪に障るんだけど。

目に付いたランジェリーショップにふらふらと入って、目的もなく物色していると、店員がにこやかに話しかけてきた。

「新しいデザインが入ったんですよ。サイズ、測りますかあ？」

店員に勧められて手にとった下着は、淡いブルーに白のリバティ・レースが爽やかに女らしい。

「ショーツとキャミもお揃いだと、かわいいでしょう?」

試着室で店員に背中から脇腹の肉を全部ブラの中に押し込まれると、サイズが上がって胸に谷間ができる。嬉しくなつてつい、カードケースを引っ張り出す。結構な金額だ。

もしもの時に着けよう、と一瞬思う。相手は誰だかつっこみたがる自分は、無視することにした。どうも「あーんなことやこーんなこと」の連想が、し難い。

一方、龍太郎の夕方である。龍太郎の部屋でゴロゴロしていた藤原と、夕食がてら駅まで歩いて見送る。コンビニでパラパラと立ち読みをして、やっぱり明日誘えば良かったなと後悔したりする。ポーンと出たばかりだから、まだ余裕あるし。まだどうにもなつてないのに、毎週誘うのも鬱陶しいかなと思うと、中々先に進めない。翌朝のパンとオレンジジュースを買って部屋に辿りつくと、すでに部屋の中が冷えている。

なんか寂しい。

コタツに足を突っ込み、テレビの電源を入れて見るともなしに眺めていると、話し相手が欲しくなる。仕事の手薄な時期なら、本を読んでみたり区営の体育館に行く元気もあるのだが、継続して何かをするには時間がぶつ切りになる時期は、どうも人恋しい。

柴犬、飼いたい。

年末のバタバタで、なかなか時間の空く日が見えないうちに水曜日になってしまった。ああ、やっぱり日曜日に誘つとけば良かった、と思つても、後の祭りである。

「おはようございまーす」

いつも通り早足で通り過ぎようとする美緒を、龍太郎は引き止めた。

「ごめん。平日とかつてメールしたけど、今週は全然予定が見えなくて」

「忙しいんなら、無理しなくていいです。時間が空いたら、声をかけてください」

「土日も現場っぱいし・・・二十三日は、ダメだよねえ？友達と約束とかあるんじゃない？」

微妙な日程だ。

「うーん、今のところ約束はないですねえ」

「じゃ、二十三日予約。行き先は俺に任せてもらつていい？」

「はいっ。お願いします」

答えたあとに「お先に」と、いつもの早足で美緒は歩きはじめる。実は、心臓はバクバクなのだ。待つてもメールが来なくて、捨て台詞のような言葉尻に腹をたてているのかとか、忘れるくらいどうでもいい話だったのかと考えると、落ち着かなかった。

良かった、怒ってない。忘れてもない。

後ろを歩く龍太郎の機嫌の良い顔は、想像もつかないのである。

「クリスマス・デート？大進展！」

「そんなじゃないっ！その日まで予定が合わなくてっ！」

「何もそんなにムキになつて反論しなくても」

ロッカールームには、美緒と鈴森以外にも人がいるのだ。松山に彼氏？どんなの？と大騒ぎになり、美緒は膨れっ面でロッカーを閉めた。

「放つといて！彼氏じゃないしっ！大体、彼氏がいるいないなんて騒ぎになるような年じゃないっ！」

「いや、他の誰かなら驚かない」
「どういう意味よ。」

「ボーナス貰ったし服買いに行くの、つきあって」
美緒がかけた言葉に鈴森は力強く頷く。

「バーゲン待ってたら、間に合わないもんね。二十三日じゃ」

「そのためじゃないっ！」

美緒の膨れっ面に鈴森は軽やかな笑いを返した。

「手持ちの服に合わせないと、組み合わせが常に同じになるよ。値が張るのはコートと靴だから、それを生かす方向で探す」

鈴森のアドバイスに従って、服を身体にあててゆく。これ、どう？と渡された服は、普段は自分で選ばないデザインだ。

「同じ丈でも、ひらひらしてるとなんかこう、膝のあたりが不安なんだけど」

「松坊に足りないのは、その不安からの緊張感」
「緊張感って」

上目遣いの美緒の視線を鈴森が跳ね返す。

「篠田さん、なんだってこう色気のない女に声かけたんだろっ・・・」

「だから、そういうのじゃないって」

「そっこのじゃない人が毎週のように誘ったら、そっちの方が怖い」

決めつけられて、美緒は黙る。つきあってもらって、更にアドバイスまでもらっているのだ。これ以上文句は言えない。

さて、問題はどこに行くかだ、と龍太郎は迷う。

できあがってしまった恋人関係ならば、話は早い。お互いの興味が一致しそうな場所を、探すこともできるだろう。水族館と博物館は、もう行ってしまった。この寒空に、庭園を散歩でもあるまい。映画、美術館、植物園・・・どんなものに興味があるんだ？忙しさに取り紛れ、考えついたのは、遊園地だ。

高い所好きだって言ってたから、ジェットコースターも好きなんじゃないかな。

どこへ行くとも知らせずに、待ち合わせた「いけふくろう」前。

「ごめん。スカートで来ると思ってた・・・」

「ヘンですか？」

焦った顔の美緒に、龍太郎も慌てる。

「いや、似合う。かわいい」

実は、ちよつとびっくりした。膝頭まで照れくさそうな姿が、妙にかわいらしい。おおっと見惚れてしまう程度には。

「どこに行くって言わなかった俺が悪いです。遊園地にでも、思っただけど」

「行きたい！すつごく久しぶり！」

美緒の嬉しそうな顔に、龍太郎は申し訳ない気分になる。

「寒くない？女の子は、腰冷やしちゃまずいでしょ。膀胱炎になるし」

うわあ、また真っ赤だ。

「なんで、そんなことに、気がつくんですか」

恨みがましく、ひとことずつ区切った言葉がたどたどしい。

「ごめん。姉貴がそれで大変だったことがあるの」

妹しかいない美緒に、家の中に男の子のいる環境はわからない。

少なくとも、男の人から膀胱炎なんて単語が出るとは、今の今まで思っていなかった。リアクションに困って泣きそうだ。

意を決して顔をあげる。

「大丈夫ですっ！タイツ履いてるし、今日晴れてるしっ！遊園地、行きましようっ！」

「わかりました。そんなに決然と言わなくても」

何のツボに入ったのか、龍太郎はひとしきり笑ってから返事をした。

「としまえん」への電車の中で、ジェットコースターは苦手だと聞いた。高いところは好きでも、あのスピードが怖いという言葉は、意外だった。

「としまえんのメリーゴーランド、古くて素敵ですよね」

「カルーセルエルドラド、機械遺産だね。百年以上前のものが動いてるんだもんねえ」

ただの会話は、先に続けるための意識のすりあわせの意味を持つ。普段なら知識に過ぎないことが、相手の興味を探る手段だ。もうちょつと、近くに行きたい。

お子様向けの乗り物には、いくつか乗った。アーケードゲームでも盛り上がった。ミラーハウスで迷子になって遊んだ。でも遊園地と言えば、やっぱり――

「一回だけ、ジェットコースターかフライングカーペットに乗らない？」

「やだっ！ 充分楽しいもん。乗るんなら、あたし、下で待ってる」
美緒の口調も、ずいぶんと馴染んできている。

「下で待つてられたら、俺が落ち着かないでしょ。一回だけ。そんなに激しくないヤツ」

龍太郎は小首を傾げて、こんな時しか使えない顔をする。

これはずるい。こんな顔されたら、断わるあたしが悪人じゃない！

「一回だけです。それ以上は身が持たない」

善は急げ、と早速乗り場に向かう龍太郎のあとを、美緒はしぶしぶついて行く。しかし龍太郎が並ぼうとした先にあるものを目に留めて、足が竦んだ。宙返りしている。

「あれは絶対にやだっ！」

すでに涙目である。龍太郎は笑いを含んだ溜息をついた。走るように歩いたり重い荷物を担いだりする姿と、その表情は全然マッチしない。ヘンな子。

「じゃ、やめときましょ。貸しにしとく」

「借りときます」

ひとしきり遊ぶと、陽が傾いてくる時間になった。クリスマスのライトアップがはじまる。

「エルドラド、行く？」

古いメリーゴーランドは上下運動しないが、暗くなりはじめた園

内の中で暖かい光を放つ。アールヌーボーの装飾も美しい。嬉しそうに馬車に腰掛けた美緒の向かいに、龍太郎も腰掛ける。

「馬じゃなくていいの？」

「スカートだもん。残念」

スカートの裾から覗く膝に、思わず目が行く。視線に気がついた美緒が慌てて裾を整えて、上目になった。

「ずいぶん慣れてきた」

「何ですか？」

「俺に」

懐いた、とは言い難い。けれど、もう「知り合い程度」ではない。天井の絵をうつとりと見上げる美緒を、龍太郎は見ていた。

確定、だ。

メリーゴーランドを降りて、自動販売機で缶コーヒーを買って座る。ライトアップに人が集まり、園内のベンチは静かだ。

「美緒ちゃん、ちゃんと言っとくね。俺は美緒ちゃんとこれからつきあいたいと思ってるんだけど」

がちつと音がするほど、美緒が固まった。

「えつとね、イヤじゃなければ、当面試用期間ってことで」

えーつとえーつと。この場合、なんて答えればいいんだろう。試用期間ってことは、本採用じゃなくって！で、その線引きって何なの！

パニック顔で下を向いた美緒の顔を、龍太郎は覗きこむ。それなりに手応えがあると思っただのは、間違いだったのだろうかと不安になつてくる。こんなに悩ませるようなことなんだろうか。

「聞いていいですか」

注意深く龍太郎の視線と絡まないように顔をあげた美緒は、混乱した顔のままである。

「つきあうってどういうことなのでしょう？このまま仲良くなつたらいけない？」

本当は、それが良いと思っていた。けれど半日一緒にいただけで「友達からはじめる」が龍太郎にとって、難しいことだと自覚してしまった。友達と恋人は、違う。

「俺と一緒にいるのは、イヤ？」

「楽しいです。でも、具体的に『つきあう』のイメージがわからないくて」

男とつきあったことがないのだろうか？美緒の顔には戸惑いばかりが浮かんでいる。それとも、断わる言葉を搜しているのか。

「イヤだったらイヤだって言ってくれても」

「そうじゃないの。何か定義があるのかな、と定義と来たか。」

龍太郎の顔がふつと美緒に寄せられ、頬骨のあたりを唇がかすつた。避ける暇も与えられず、美緒はそのまま大きく目を見開いた。

「日常的にこういうことがしたいってことです。独占権付きで」

ずいぶん遅れて上半身を思い切り引いた美緒は、両手に顔を埋めて呻いた。本当に免疫がないのだと、考えるまでもない反応だ。

「いきなりそういうこと、する人だったんですか？」

キスなんて、はじめてじゃない。ただ驚いただけだと自分に言い聞かす。

「そういうことする人なんです。おイヤでしょうか？」

こうなると、ペースを掴んだほうの勝ちだ。

「イヤとかそんなんじゃないくて」

「じゃ、決定」

「決定なんですか？」

「イヤじゃないんでしょ？」

「ずるい」

「イヤじゃないって言ったでしょ？」

上手く誘導された気がすると美緒が思っているうちに、龍太郎は空いた缶を持ってゴミ箱に向かっていた。

「ライトアップ見たら、池袋まで出て、メシにしょ」

美緒は、頷くことしかできない。

「さっきのも試用期間のうちなんですか」

「さっきのって？」

だから、頬へのキスだつてば・・・それも、言えない。

「で、クリスマス・デートはどうだったの？」

昼休みにランチに引つ張って行かれ、美緒は鈴森の尋問を受けていた。さすがに大勢で取り囲んでの攻撃は避けたいらしい。とは言っても、美緒の相手が「本館五階のかわいい彼」だというのは知っているのは、鈴森だけではなくていのである。

「・・・試用期間」

「何それ？」

拗ねたように口を噤む美緒の断片を繋ぎ合わせて、鈴森は推測する。

「何にせよ、そういうことになると思ってた。頑張ってたね」

頑張るって、何を！

年末も二十八日になってから、龍太郎の仕事はやっと一息つく。

現場は終わり、翌日の仕事納めは内勤することになった。毎年午前中から社内の片付けをして、適当な時間に納会が始まり、早い時間に解散になる。

飲みに行こうと藤原に誘われ、一も二もなく賛成してエレベーターでロビーに降りると、龍太郎の前に三浦がいた。

「あ、ふたりでどこか行くのお？ いいなあ」

誘う気、ないから！

良いお年をー、と笑顔を返しながら、藤原に目配せして別館から出ることにする。ビルから出たところに、また見知った顔があった。事務服のままエプロンをつけ、髪を括っている。しかも、缶ビールのケースの上に段ボールを重ね、ツマミらしい乾きモノやスナック菓子を載せたものを抱えている。顎で落ちないように押さえているらしい。先に吹き出したのは、藤原だった。

「持とうか？フジ、ビール持ってやって」

とりあえず喋れるように上に乗せている段ボールの箱を外すと、美緒はほっとした顔になった。

「営業さんがそこまで車で持って来たんだけど、今、駐車場に車を入れに行つて。この体勢だから下にも降ろせなくて、戻ってくるの待つてたんです」

「美緒ちゃんつて力仕事担当？」

「持てますもん。納会は部単位だけど、女の子はもうひとりしかないの。彼女は今、先に来たデリバリー品の用意してて」

「持てないと言えば、当然誰かが手伝った筈である。」

「ありがとう。なんか得しちゃった」

にこにこしながら言う顔を見て、ほっこりした気分になる。車を回して戻った営業に荷物を渡して、龍太郎と藤原はビルを出た。

「後で、メールする。明日から休みだから」

「あれがウワサの松山さんの彼氏？」

「誰がウワサした？」

「あちこちで。すつごくかわいって。松山さんより小さいね」

「まだ本格的に彼氏じゃないっ！身体の大きさは本人の責任じゃないっ！放つといて！」

荷物を持って手が塞がっているの、美緒は足の甲で大木の膝の裏を蹴った。おおいて、と顔を顰めた大木と一緒に階段を昇る。

「彼氏ができて、女っぽくならないね」

「うるさい！」

階段が暗くて良かった。あたし、今、顔が熱い。

「あれ、三浦より上？胸も色気も皆無に見えるんだけど」

「全然上。皆無じゃないだろ、見てないけど」

意識した上目遣いで、かわいらしさを自分から強調するような女は、いやだ。それよりも、スカートだからメリーゴーランドの馬に

乗れないのが残念だと、大真面目に言う女がいい。

「貧乳は、悲しい」

「でかきやいいってもんじゃない」

「形も重要だよな」

何の話だ。

get nervous 5

メール、来ないんですけど。

十一時を過ぎた。龍太郎からのメールは来ない。美緒は隣に携帯を置いたまま、本を読んでいた。メールがいつ来るのかと、読書に集中できない。

明日から休みだからというのは、明日待ち合わせしようってことなの？それとも休み中はどうするのかって話なの？

まだ出先かと思うと、連絡したらいけないかとも思う。遊んでいるのはわかっていているのに、遊んでいる相手もわかっていているのに、なんとなく気が引ける。メールが遅いと文句を言うほど、まだ相手に慣れていない。

やっと着信音が鳴ったのは、十一時半だった。メールではなくて、通話である。

「こんなに遅い時間だと思わなかった」

そう言うのが精一杯だ。

「他の人が何人か合流して、帰るのが遅くなっちゃった。ごめん」

他の人、で美緒の頭に一瞬ピンクのコートが浮かぶ。あっちの会社、若い人が多くて仲が良さそうだったもの。その連想は、なんだかとても面白くない。美緒は納会の後、片付けに手間取って会社を出たのが八時過ぎだったのだ。

「連絡、待ってた？」

自分で、メールするって言ったクセに。

「待ってません」

「すぐ電話に出た」

待っていたことは、自分でもよく知っている。認めるのは、少し勇気が必要な感情のような気がする。

翌日の午後に待ち合わせることにして、通話が終わる。

「明日は遊園地なんて言わないから、スカートでも大丈夫だよ。屈むと見えそうなやつ」

「・・・オヤジ？」

受話器の向こうから、笑い声が届く。

「まあ、中身はそんなモン。映画にでも行こう。じゃ、また明日」
ちよつと酔つてたな、と美緒は思う。こっちが構えて喋らなければ、向こうも碎けた語り口になる。急ぐ必要はない、試用期間なんだから。こちらが向こうを知らない分、向こうもこちらを知らない。待っている気分って、それほど悪くないな。

手足に力を籠めて立ち上がり、美緒はクローゼットを開けた。ボーイッシュな服に甘い差し色、鈴森に指導されたテクニクを試してみなくては。

試用期間でとか言っちゃったけど、すぐにでも本採用したいんだけど。こればかりは慌てたら全部ペアだし。

とりあえず「篠田さん」は、つかえながら「龍君」になった。とても呼び難そうではあるが、仮がついても「つきあっている」のだからと言ったら、「そんなものかなあ」と要領を得ない顔で引き下がった。龍太郎の実家は電車でも一時間程度の場所なので、冬休みだからと長くいるわけでもなく、大晦日の晩に帰って、正月二日には自分のアパートに戻る。姉の結婚相手が挨拶に来て、父親が酔っ払ってしまったのを潮に家を出発した。電車の中で携帯をポケットから出す。

明日、会えたらいいな。

―妹と初売り巡りして、ぐったりしてます（福袋ゲット！）明後日は予定があるので、明日なら大丈夫です。

送信してしまってから、美緒はもう一度文面を見直す。大丈夫、変なこと書いてない。

―上野まで行く。会ってから行き先を決めよう。

時間の連絡の簡単なやりとりの後、「おやすみなさい」のメールへの返信が「早く明日になるといいな」だった。携帯電話相手に、どんな顔していいのかわからない。

なんだか恥ずかしいんですけど。

実は、休み中ずっと気にしていた。メールは毎日来るのだけれど会おうという言葉はなくて、実家に帰るのは知っていたが、実家からいつ戻るのか知らなかった。友達との新年会は、ずいぶん前に決まっていたので、四日は予定があると話した記憶はあっても、覚えていないかも知れない。気になるんなら自分から連絡すれば良いのに、それがなかなか難しい。

福袋の中身をベッドの上に広げ、その横に胡坐をかく。
何、着てけはいい？

明けて翌日、上野の大パンダ前で。龍太郎が着ているのはMA-1ではなく紺色のダッフルコート、「腰が寒いから」と至極真つ当な理由だ。インターネットの専門店でサイズを取り寄せているので、もちろん仕立はメンズである。子供服や婦人服とは肩幅が違うのだ。姿を認めた美緒が近づこうとした時だ。東洋人ではないと思われる、身体のかなな男が龍太郎に近付き、何か話しかけている。道でも聞かれているのかと、美緒は足を緩めた。

と、みるみる間に受け答えする龍太郎の顔が赤くなっていく。

「男だよ！I・m a man！ふざけんな！」

何を言われたのか、尋ねなくてもわかる。話しかけた男が立ち去り、龍太郎の顔色が戻ったのを確認してから、美緒は後ろから声をかけた。

「遅くなって、ごめんなさい。電車に乗り遅れちゃって」

見てないよな、見られてない。見られたくない。こともあるうに男にナンパされてるところなんて。シャツ一枚の夏場よりも、当然冬の方が確率が高い。そして今回、膝上まで覆っているコートだ。大抵の場合こついスニーカーを履きバッグを持っているので、日本文化で育った男ならば気がつくところだ。

よりにもよって、女の子との待ち合わせの最中に——ちくしゅっ！

美緒の顔が微妙に気遣わしげなことに、気がつく余裕はない。

とりあえず東照宮で初詣をして、寒いので正月から開いている科学博物館に入った。芸がないと思わなくてもなかったが、細かく見て歩くと結構楽しいものである。

中に、剥製だけを並べたフロアがある。

「なんか、怖い」

美緒は表情を強張らせた。室内はガラガラだ。

「生きていないものが生きてた時の形で立ってるのって、怖い」

美緒の指が宙をさまよっている。その指を龍太郎がキャッチし、下ろしてそのまま握る。

「案外と怖がりだね」

手！手！握ったままなんですけど！これは試用期間のうちなんですか！

しんとしたフロアの魂のない動物たちに、怯んだのは確かだ。でもこれは、剥製よりもインパクトが強い。握られている手を引き抜くのも、なんだか気が引けて、美緒は無口になっていた。龍太郎の顔には、ごくごくアタリマエの表情が浮かんでいて、自分だけがジタバタするのも癪に障る。手を繋ぐプラスアルファくらいなら、経験済み！オタオタしない！

それにしても、指の細いやさしい手。

自分の手に繋がる手をこっそり盗み見て、それからもう一度、まじまじと見下ろした。

「どうかした？」

「手、ずいぶん荒れてる」

通路まで出て、美緒は自分のバッグの中からハンドクリームを取り出した。

「せっかく綺麗な手なんだから、そんな風にしといたらもったいない」

「クリームの類、キライ。ベタベタする。綺麗じゃなくても不都合ないし」

「そんな細くて長い指、あたしと取り替えて欲しい」

言いかけて、龍太郎の顔が曇ったのが見えた。

「替えられたらいいんだけどね。俺はこんな手、好きじゃないし」

自嘲笑いのような溜息に、駅で見た光景を思い出した。「綺麗」は褒め言葉じゃないんだ。

「でも、その手は可哀想。ノビの良いクリームだから、ベタベタしないよ」

美緒がチューブを差し出すと、龍太郎は手の甲を上に向けて、胸の辺りで揃えた。

「塗って」

何を言い出したのかと、思わず顔を見る。

「俺は要らないって言うてるのに、塗りたいのは美緒ちゃんだもん。手、貸してあげるから塗っていいよ」

言い分は間違っていない。間違っではないが、これは――

「そういうこと、言う人だったんですか」

「言う人なんです。おイヤでしょうか？」

額に手をあてて、美緒は俯いた。

えいつと覚悟を決めて、龍太郎の手を自分の手に乗せた美緒は、丁寧クリームを伸ばしはじめた。

華奢な人って、指まで華奢なんだ。あたしの手より、ずっとやさしい手。綺麗なのに、持ち主に気に入ってもらえないなんて、可哀想。

親指の付け根を強く押して、仕上げだ。顔をあげて終わりを告げる。

「ありがとう。手のマッサージって案外と気持ちいいね」

少し照れたように笑う龍太郎の顔から、美緒は慌てて視線を逸らす。この顔には、ちよつと逆らえない。強力な武器だ。

試用期間なんて言わなくなつて、彼女なんてすぐに見つかりそう。たとえば、あのピンクのコートみたいな。

そう思ってから、自分の考えがイヤになる。とても卑屈になった気がした。

一度通った道は、通りやすい。寒いけど屋上に行ってみようか、と龍太郎は当然のように美緒の手をとった。文句を言うわけにもいかず、美緒はおとなしく手を引かれる。

ドキドキする。このドキドキは、ワクワクに近いドキドキだ。

龍太郎と美緒は今、感情を共有しているのだが、お互いがそれを知らない。不安を含みながらも何かが始まる予感を、自分の心の中に抱え込むのみだ。

屋上の休憩所で缶の紅茶を買うために一度手を離れた龍太郎は、下のフロアに戻る階段で、また手を差し出した。

お手！わん！懐きかけた柴犬は、もうじき首輪をつけさせてくれる・・・かも知れない。（（注）そうは問屋が卸すか）

朝の悪い出来事を払拭したかのように上機嫌の龍太郎と、自分の感情に整理がつかないまま気分だけが上ずった美緒は、向かい合わせでパスタをフォークに巻きつけていた。

「大盛じゃなくていいの？」

「家にいると食べすぎちゃって、あんまりおなかが空かないの」

「疲れたんじゃないよね？」

普段から女の子扱いに慣れていないので、気を遣われると緊張する。

「大丈夫。あたし、頑丈だし」

「でも、筋力も体力も違うでしょ。俺みたいなチビでも、美緒ちゃんより腕力は強いし」

アイドル顔で笑う龍太郎に、腕力があるなんて想像もできない。

この人は体重1.5倍に喧嘩仕掛けちゃう人だったな、と思い出す。とりあえず、美緒の想像の範囲外ではあるらしい。

「おお。初日から同伴出勤」

「それ、なんかニユアンスが違くない？」

あけましておめでとう、の前の会話である。美緒と龍太郎が並んで歩く横に、藤原が並んだ。

「あたしも同伴させて？篠ちゃんを女になんか渡すもんですか」

「・・・やめろ、正月から」

出社時には早足で通り過ぎるだけの美緒が、はじめて隣を歩いているのだ。

「男にモテても嬉しくねえ」

「女にだってモテるクセに。篠ちゃんのいけず」

黙って横を歩く美緒が、まったく違うテンションで受け止めているのだとは、藤原も気がつかない。

そうだよな、普通に考えたら人気はあるんじゃない？顔は良いし、性格も悪くないと思う。ちゃんと社会人だし。身長だって、気にする人ばかりじゃないもん。

本館のロビーから入って美緒が手を振った時、龍太郎の後ろからピンク色のコートが近付くのを見た。

「篠田君、藤原君、あけましておめでとう。今年もよろしく」

顔が明らかに龍太郎の方を向いている。

むか。感じ悪っ。

当然、美緒が何かされたわけではない。だから、何故それを感じ悪いと思うのか、自分でもよくわからない。強いて言えば、語尾に漂う媚が気持ち悪いと思う程度である。

「松山さん、勘がいいね」

美緒の表情を見送った藤原が、ニヤニヤ笑いながら龍太郎に話しかける。

「松山さんって、誰え？」

「篠ちゃんのカノジョ」

さらりと答えた藤原は「俺も今日から階段で行く」と龍太郎と階段室に向かった。

「お正月、進展あったあ？」

こちらはロッカールームで着替え中の美緒の方である。

「2回、一緒に出掛けた」

不機嫌の残る顔で、美緒は鈴森に返事をした。

「順調じゃない。で、そのぶすつたれた顔は何なわけ？」

「あたしって、女っぽくないよね？」

何を今更、と鈴森は笑う。

「女っぽさを求める人は、もともと松坊になんか声、かけないでしようよ。篠田さんだってそうじゃない？」

「篠田さんのことじゃないっ！」

赤くなりながら、美緒は言葉を返す。

「またまたあ。今までそんなこと言い出したことないクセに、そんな顔で否定しなくっても」

「違うつてば！」

「あーあ。中学生レベルから始めなきゃなんない篠田さんって、力ワイソー。早く育たないと、待ちきれなくなるぞお」

膝掛けを抱えた鈴森は「お先に」とロッカールームから出て行った。そういう意味じゃないんだけど。呟く美緒にも、どういう意味かは説明できない。

—おやすみなさい。

携帯のフラップを閉じた龍太郎は、自分の顔が緩んでいるのを自覚している。次は一緒に何をしようか。くるくる変わる表情が面白くて、驚かせたり笑わせたりしたいと思う。意外に臆病で小心な部分もかわいいと思う。もっと他の顔も見たい。たとえばキスしたら、どんな顔をするんだろう？

映画の趣味は似ているらしい。ハリウッド映画よりも単館映画が好きで、日本のベストセラー小説の映画化したものを、見に行く約束をした。身体を動かすことが苦にならない部分も、似ている。春が来たら、森林公園辺りでサイクリングなんかもいいかも。

湯船の中に丸まって、美緒は次の休日について考えていた。映画を見て、お茶を飲んで終わりでは、物足りないような気がする。外見は小さくてやさしげだけれど、意外に短気で負けず嫌いな部分が会話の端々に出てくる。自分に向けられる表情は、時々驚くほど大人の顔だ。何かに戸惑ったりすると、わかっているとばかりに頷かれることがある。にもかかわらず自分の要求は、あの大きな瞳で押し通すのだ。

あたしが何かに関心を寄せるたびに、彼は楽しそうにそれを見ている。博物館の恐竜の骨とか、映画館で買ったパンフレットとか。そして、自分の好きなものにあたしが興味を示しただけで、この上なく嬉しそうな顔をする。あの顔をもっと見たい、と思う。

日曜日に待ち合わせて行った映画は美しかった。深くてせつないラブストーリーで、長身の俳優のやるせない表情は素晴らしかった。そして、静かな——性愛のシーン。

えっとえっと、綺麗なんだけど、自然なんだけど。 だけど。

美緒は龍太郎の横顔を盗み見て、落ち着かない。やっぱりハリウッドの娯楽作品にすれば良かった、と後悔する。どんな顔していいかわからない。自分にもこれが訪れるのは、知ってる。不自然だともいやらしいとも思わない。試用期間なんて言ってるけど、その後には。

きゃ——！

美緒の頭がジタバタしていることを、龍太郎は知らない。

一緒にパンフレットを覗き込みながら、静かでせつない映画だったね、と感想を言い合う。パンフレットの中に、件のシーンの写真がある。慌てて視線を逸らした美緒は、まったく別のことを考えている。

この人はその時、どんな顔をするんだろう？

自分の想像にあっけにとられ、猛烈に恥ずかしくなる。

あれくらい身長があれば、女の子はすっぱり腕の中なんだよな。

龍太郎も別のことを考えているのである。自分の小さな身体とか細い腕とか、そんなものに腹を立てても仕方がないことは重々承知なのだが、時々どうしようもなく憂鬱になる。見てくれに寄って来られるのはいい。だけど、それは自分が望んだものではない。女の子を安心して寄りかからせることは物理的に無理で、それを諦める代わりに俺が欲しいのは「見てくれ以外の俺」を求めてくれる子だ。はじめから俺を「男の人」と言ったこの子は、少なくとも容姿じゃないところも見てるんだよ。

ランチの時に美緒が後ろの席の会話に気を止めたのは、「篠田君」という単語が出てきたからだ。珍しい姓ではないだろうが、田中や佐藤のように多くはない。

「・・・さ、篠田君と朝・・・っていうか・・・つりあいが・・・たいして綺麗な子じゃ・・・」

あたしのことだ、と気がついた瞬間、箸が止まった。

「どこが・・・なわけ・・・向こうから・・・飽きるんじゃ・・・もっと小さくてかわいい子・・・」

つまり、あたしは龍君より大きくてかわいくないから、つりあいが取れないって言ってる？振り向きたいのを必死でこらえ、箸を握り締めるが、口に運ぶことができない。表情の強張りに気がついたランチ仲間が声をかけても、聞こえないほど美緒は後ろの会話に注意を向けていた。

「・・・の身長じゃ・・・だけど・・・選びようが・・・ねえ」

「松坊、どうしたの？箸が進んでないじゃない」

「・・・残す」

食べられない。誰がどんな噂をしているのか、確認したくても振り向けない。直に言われたわけではない分、これはきつい。他人からどう見えるか、なんて考えたこともなかった。つりあわない？

「具合悪い？あんたが出された物残すなんて」

「違う違う、今朝お餅みつつ食べてきたから」

あたし、今、ちゃんと笑えてるだろうか？みんながあたしの顔見てる。楽しい息抜き時間、雰囲気壊しちゃダメ。

美緒のグループより先に席を立った後ろの集団は、揃ってレジの前に立ち、やつのことで振り向いた美緒の目に映ったのは明るい髪の色。

髪型に見覚えがある。ピンク色のコートの人だ。

同僚たちと並んでも一際小柄で華奢なその後ろ姿は、龍太郎の横に立っていたら自然なカップルに見えるような気がした。

帰り時間を合わせて美緒と龍太郎は待ち合わせをしていた。少し会話にハズミがないかなと思う程度で、龍太郎は美緒の鬱屈には気付かない。食事を終え、通りがかりのガラス張りのビルに映る自分たちに美緒は気がつく。

あの人たちが言ったのは本当だ。少なくとも、あたしと龍君はカップルに見えない。

ニットコートにスキニーのジーンズ、斜め掛けのポストマンバッグ。そのスタイルは動きやすいし、会社に行けば制服があって失礼にはならない。だけどスーツの上にコートを着た龍太郎とは、どう見てもアンマッチだ。

紺色のダッフルコートに寄り添ったピンク色のコート。出社する時も休日に遊ぶ時も同じスタイルのあたし。おかしいのは、あたしの方だ。誰が見ても多分、評価はマルの龍君につりあってないのは、あたしだ。

試用期間と言ったのは、龍君の方だ。あの時は、迷っているあたしに猶予をくれたんだと思っていただけ、龍君からも試用期間なんだろうか。あたしが決定通知出しても、向こうから不採用です、なんて。

そうか、あたしはもう決定するつもりでいたんだな。その前に「つりあわない子とつきあってる」と言われてるんだとしたら、とても申し訳ないことをしてるのかも知れない。少なくとも、そう思う人があるんだから。

「あれ？今日はずいぶんOLさんらしいカッコ。どうしたの？」

ロッカルームで鈴森に声をかけられ美緒は、まあちよつと、と言葉を濁す。せめて並んだ時に違和感を感じさせない程度に合わせたいなんて、自分の考えが媚を含んでいるようで嫌だ。

「金曜日だし、今晚おデート？」

「時間が合えば」

デートという言葉に過剰反応しなくなった、と美緒は思う。日常に組み込まれてしまえば、ただの単語でしかなくなる。自分の感情にも、そうやって馴染んでいくのだろうか。

夕方近くに残業の確認のメールがあり、ビルのロビーで待ち合わせる。階段室からロビーに出たところで目に入ったのは、龍太郎と何人かの同僚。女の子の方が少し多めなのは、仕事帰りに、と誘いあったからだろう。

「じゃ、俺はそういうことで」

抜けて背を向けた龍太郎は知りようがないが、美緒は龍太郎の肩越しに値踏みするような視線を見ていた。自分の勤め先とは雰囲気の違い社風なのだろう。全体的に華やかで明るい雰囲気だ。視線を寄こしているのは女の子たちで、「ああ、あれが」なんて目で会話をしているようだ。

やだ。なんか怖い。

今まで「すつごく鈍い」美緒は、同性にけしかけられたり呆れられたりすることはあっても、こんな視線にさらされたことはなかった。「誰そのカノジョはどういう子」なんて噂話することはあっても、されることはなかったのである。一際強い視線は、ピンク色のコート。明るい色の髪に、綺麗なアプリコットカラーのリップグロウが、自分のアピールポイントをきちんと把握している「女」

に見える。

ふいに足に合わない靴を履いているような気分になり、美緒は怯んだ。

「さて、行こ行こ」

美緒に寄った龍太郎は、強張った顔に気付かずそのまま歩きだした。

「会社の人たちにつきあわなくていいんですか？」

「美緒ちゃんに声かけた方が先だもん」

それに今のところ、こっちの方が優先度高いし、と龍太郎は思う。
「何か食べたいもの、ある？」

そう聞きながら美緒に向き直った時、やっとその表情に気がついた。よく笑いそうな明るい表情は潜み、変わりに浮かんでいるのは怯えに似たものだ。

「何か嫌なことがあったの？」

「ないですよ？仕事も上手く片付いたし、明日はお休みですもん」
慣れた証拠のように気易くなっていた口調が、元に戻っている。

しかも本人は、それを意識していないらしい。

昨日の朝、駅から歩いた時は普通だったぞ。今朝は会ってないけど。

それからおもむろに美緒の服装に気がつく。ハーフコートと膝丈フレアスカート、いわゆる「女の子服」だ。普段とずいぶんイメージが違う。それが余計におとなしやかに見えるのだろうか？

もう一度、どこに行こうか？と声をかける。

「知ってる人の、あんまりいないところがいい」

ぼつんとした返事が戻った。

「どういう意味？」

龍太郎の真剣な声に我に返った。何を言っただんろう？

「なんでもない。おなか空いたね。どこにする？」

「だから、どういう意味？」

聞き逃してくれる気は、ないらしい。美緒は途方に暮れて足元を見つめた。

だって、どう言っただんろう。龍君と歩いている姿に違和感を感じる人がいて、それが怖いなんて。

「俺と一緒にいるところを見られるのがイヤだってこと？」

答えることのできない美緒は、それきり口を閉ざした。

こっちに来て、と龍太郎が導いたビルの谷間の緑地帯は、とても寒い。

「寒いけど、ここなら人もあんまり来ないし、他のテーブルに気を遣うこともないから。ねえ、こういうことか説明してよ。俺がチビの童顔だから恥ずかしい？」

「そんなじゃない」

「別にそうならそう言ってもいいんだよ。今までそんなことは何度もあったし」

でも、今度は違う風に期待しちゃったんだ。女に間違われる俺を「男の人」って言うてくれたから。

「そうじゃないのっ！」

美緒の喉が詰まる。石のベンチに座り込んで、言葉を捜しながら見上げた龍太郎の顔は、ひどく寂しそうだった。何か言わないと傷付けてしまう、そう思いながら美緒は必死で言葉を捜した。

「龍君じゃなくて、あたし。あたしがもっと女の子らしくてかわい

ければ、誰も何も言わないのに」

「誰かに何か言われたの？」

しまった。これじゃ、そう言っている人がいると告げたようなものだ。美緒はまた俯いた。

美緒の横に龍太郎が腰掛ける。石のベンチは冷たい。

「それって、俺がこんなツラじゃなくて、こんなチビじゃなきゃ誰も何も言わないってことだよな」

一緒に俯いた龍太郎は、誰が言ったかとは聞かなかった。

「容姿なんて、俺が選んだものじゃない。誰がどう見ても仕方ないけど、それで拒絶されるのはイタイ。でも、どうしてもイヤなんだったら、それは仕方ない」

「違うの。あたしが龍君に申し訳なくて。せめてもう少し誰から見ても」

だって、どう考えても合わないのはあたしだから。美緒はその言葉を読み込んだ。

「女の子らしくてかわいいでしょう。俺はそういう子につきあって欲しいんだけど」

他人の基準の判断なら、いらぬ。龍太郎は俯いた顔を起こした。

「俺の容姿は、我慢できないくらい嫌い？」

美緒は首を横に振る。ううん、好き。これは声に出さない。

「誰からもお似合いですって言われたい？」

ううん、そんなの無理。やっぱり首を横に振る。

「俺は美緒ちゃんが、すごくかわいいと思ったから、顔を覚えてたんだ。他人にどうこう言われる筋合いなんかない」

「俺がそう思ってるだけじゃ、ダメ？」

顔が近い。視線が絡まって、外せない。

龍太郎の手は柔らかく伸びて、美緒の首を引き寄せた。

「本採用、待ってるんだけど。それとも不採用？」

返事していいんだろうか。本当にあたしでいいの？
返事をする前に顔が更に近付き、戸惑いながら美緒は瞳を閉じた。

食事を一緒にしても表情の戻らない美緒を乗り換え駅まで送ったあと、帰宅して炬燵に足をつ突っ込んだ龍太郎の携帯が震えた。発信者は藤原、時刻は十一時半である。

「篠ちゃん、泊めてえー」

「ウチは簡易宿泊所じゃねえ」

「もう、池袋まで来ちゃったもん。それとも松山さんがいる？」

「・・・まだそんな段階と違う」

「あ、電車出る！じゃ、三十分で着くから！」

甚だ勝手だが、毎度のことと言えば毎度のことだ。

藤原が来る前にシャワーを浴びてしまおうと思った所にメール着信がある。

―無事、帰宅しました。今日はごめんなさい。

謝ることないのに、と龍太郎は思う。もともとが自分に起因する事柄で、だからあんな顔をさせたのは俺自身だ、と悔しい。慣れてくれと言うのは容易い。好きなんだからと押し付けてしまうことも簡単だ。

「とりあえずシャワーだっ！」

―今からフジが来るらしい。明日、メールする。おやすみ。

携帯電話のフラップを閉じて立ち上がる。

いいよな、顔のいいヤツは女にチヤホヤされていい気になれて。そんなことを言われた研修時の、思い出したくないことまで思い出す。

ちくしょう。羨ましけりや俺の外見そっくりくれてやるよ。

言いたい相手は、入社して半年で会社自体を辞めて行ったが。

「しーのーちゃんっ！あつそびつましょっ」

「酔ってんな、てめえ」

「酔いますよう。三浦から質問攻めだもん。他の人がどん引くくらい、松山さんのこと根掘り葉掘り」

大きなコンビニの袋を龍太郎に差し出してから、藤原は備え付けのスウェットに着替えてスーツを吊るす。

「余計なこと言ってねーよな」

「言うほど知らねーもん。篠ちゃんが声かけて篠ちゃんがめろめろだっつーのは言つといた。不満そうだった。いや、うるせーうるせー」

それは、とてもリアルに想像ができた。

「まま、篠ちゃんも飲んで飲んで。なんかさー、誘導するわけよ、向こうから声かけたんじゃないかとか、たいして綺麗でもないよね、とか」

「俺の趣味だ、放つとけ」

「放つとけない人もいるんですよ。やーね、モテる男は」

あれは、俺が相手にしてないからムキになってるだけだ。プライド高そうだし。

龍太郎は冷静にそう考える。

盛大にシャンプーの泡をたてながら、美緒はまた思い出していた。キス、しちゃった。あれが返事になるんだろうか。俺がそう思ってるだけじゃ、ダメ？あの言葉がとても嬉しくて、そんな風に言ってもらえるあたしが、しあわせだと思った。でも、本当に？

じゃあ、不採用だつて言つて、取り消してもらおう？それでメールを待ったり、自分がどう見えるかなんて気にすることはなくなる筈。そして、あたしは「誰から見ても不自然じゃない男」と出会う。龍君も「誰からもお似合いに見えるタイニーな女の子」と一緒に歩きたとえば、あのピンク色のコートの人みたいなの。

それは、いや。

自分の中の力強い声に、シャンプーを流すために掴んだシャワー

の柄を握り締めた。

―龍君が、とてもとても好きです。
やっとの思いで送ったメールは、夜中の三時を過ぎていた。
これが、あたしの結論。

朝の九時にがばつと起き上がった美緒は、龍太郎の携帯電話を呼ぶ。数回のコールの後、眠そうな声が聞こえた。

「昨日のメール、読んだ？」

「・・・おはよ。メールくれたの？昨夜はフジと三時くらいまで呑んでただけど」

「読まないで、消して」

ああ、夜中のテンションって怖い。なんて恥ずかしいメール送ったんだろ。あんなダイレクトな。

「何か、まずいメール？」

「そうっ！不幸を呼ぶメール！だから読まないで削除して！」
顔から火を噴きそうだ。

「とりあえず、了解。夜にまた連絡する。うん、今日は洗濯とかしてる」

美緒の普段通りの口調に安心して電話を切った後、龍太郎は慌ててメールを開く。タイトルは「ごめんなさい」だ。一瞬ぎくつとして、動きが止まる。

「松山さんから？上手く行ってるじゃん」

もぞもぞ起きだした藤原が寝惚けた顔で煙草に火をつけたのを横目で見て、窓を開けながらビクビクしてメールを開く。

瞬間で残った酔いが吹きとんだ。膝から崩れそうだ。炬燵の上に顎を載せて、煙草の煙を追っていた藤原の視線が龍太郎に留る。

「恋する乙女みたいだね、篠ちゃん」

龍太郎は炬燵の中に足を戻し、我が物顔で伸びている藤原の足を蹴り飛ばした。

「朝から赤くなるようなメールが来るわけ？」

「うるせえっ！」

この動揺の仕返しは、明日してやる。

読まずに削除してくれと頼まれたことは、藤原の吐き出す煙と一緒に窓の外に流してしまった。

了解とか言っただけ、絶対読んだ。美緒はベッドに入り直し、布団を頭から被って呻いた。

嘘じゃないけども！覚悟は昨晚決めたつもりなんだけども！なんて文面をあたしはっ！

――龍君がととても好きです。

何かを投げつきたい気分になのだが、何を投げたら良いのかわからず、布団の両側を身体に巻き込んだ糞虫の形になって、伸び縮みする。

「美緒ちゃん、朝から何やってんの？」

気がつくと自室のドアが開き、妹が覗きこんで呆れた顔をしていた。布団の隙間から「おはよ」と返事を返す。

「麻紀ちゃん、明日チェックのワンピース貸して？」

「イグレットのケーキ、ふたつで手を打つとく」

「・・・足元見てる？」

not assumption 2

「葛西臨海公園。大観覧車に乗りたいつて言つてたでしょ？」

「今時期だと、空いてるかな」

翌日の打ち合わせをして電話を終え、美緒は携帯を充電器に置いた。

大丈夫、龍君変わってない。あのメールについて何か言われたら、舌嚙んで死ぬ！

妹から借りたワンピースを眺めながら、ふとキスに思い至る。龍太郎の形の良い唇、近付いてくる顔、目を閉じた自分。昨夜は頭がいっぱいで、それは重要事項じゃなかった。

えつとえつとあのあの！大丈夫、未経験じゃないっ！

けれどそれは高校生の頃であつて、これから順調に何事もなく進むと、その先には「あーんなことやこーんなこと」が待ち構えているのである。多分、間違いなく。

B o m b！美緒は自分しかない部屋で、赤面した。

葛西臨海公園の駅で待ち合わせに現れた美緒は、やっぱり挙動不審だった。一言で言えば、どっちを向いて良いやら、わかっていない顔である。

「短いスカート、はじめて見た」

「短いつていつても、ちゃんとスパッツ穿いてるもん。生足じゃないし」

自分と会うために、服装に気を配ってくれるのが嬉しい、と龍太郎は思う。美緒は龍太郎の顔を見ずに、やたらめったらキョロキョロしている。その手を掴んで水族園に向かい、チケットを買う時に一度手を離してから、入場してもう一度掴み直す。

「龍君、手を繋ぐの好きだよ」

素直に手を預けた美緒が、前を向いたまま言う。また緊張してい

るらしい。

「俺と美緒ちゃんのデフォルトですから」

「いつから？」

「これから。独占権付きで」

美緒の視線を捕えてから、龍太郎はにっこり笑った。

「昨日のメール、採用通知だね」

「読まないで削除って言ったのに！やだもうつ！離して！」

アカシユモクザメの前でジタバタする美緒の腕を脇の下に抱え込み、龍太郎はしばらく美緒の耳の色を見ていた。ちよつとおとなしくなったところで、腕を緩める。

「腕力は俺の方があるって言ったでしょ？細いから非力ってわけじゃないんだから、諦めなさい」

手を握られたまま、美緒はしゃがみこんで膝に顔を埋め、呻いた。
「消してって言ったのに・・・しかも、こんなところでそれを持ち出すなんて・・・」

「じゃあ、どこなら良い？海の見えるホテルのベッドの上？立ちましようね、邪魔になるから」

ほぼ半泣きの顔で立ち上がった美緒と順路を進む。

「そついうこと、言う人なんですネ？」

「言う人なんです。おイヤでも、手遅れ」

寒いから少しだけと海まで行つて、美緒が大ぶりのバッグから取り出したものを見て、龍太郎は笑い、美緒は膨れた。

「レストハウスが混んでると困ると思つてっ！なんでそんなに笑うの！」

「いや、嬉しいけど。らし過ぎて」

アルミホイルに包まれたおにぎりが、無造作にスーパーの袋にころころと入っている。とりあえずウェットティッシュは一緒だが、そのみである。本当は絵にかいたような弁当を作ろうかと思つたのだが、それを開ける時の自分を想像しただけで、転げ回りたくなるほど美緒は恥ずかしかったのだ。それでも、いつも自分より先に財布を出してしまう龍太郎に申し訳なくて、必死に考えた「一番恥ずかしいもの」だった。

そうか。龍君から見たあたしって、こんな感じなのか。

「ありがとう」

膨れながら声に向き直ると、照れたような笑顔があつた。

「昼飯に気を遣つてくれたんでしょ？嬉しいよ」

財布を出すたびに美緒は「払う」と強弁する。暮れのボーナスはまだ残っているし、年下でしかも一般職の美緒よりは、所得は多いはずだ。アパートを借りている分、物要りは物要りだが。それでも「金を使わせている」と気にして昼食を用意しようとする美緒は、龍太郎にとって「紛れもなく女の子らしい女の子」だ。

おにぎりのアルミホイルを窺つて口に運ぶ。

なんか、すげえ嬉しい。どうしようつてくらい嬉しい。

隣でペットボトルのお茶を口に運ぶ美緒を見る。冷たい風に煽られて、目を細めている。摩く髪、スカートの裾を押さえる手、そんなものに目を奪われる。食べ終えてアルミホイルをくしゃりと潰し、

礼を言う。

「旨かった。ご馳走様」

ほっとしたような笑顔が戻った。

頬に触りたい、と意識したわけではない。気がついたら手が伸びていた、というのが正しい。そして、龍太郎の指が顔に向かって伸びるのに気がついた美緒は――大きく身体を反らせて避けた。

「何ですかっ！」

悲鳴のような声が、やけにおかしい。

「何も逃げなくても」

「いきなりこんなところで顔触ろうとしたら、誰だって逃げます！」

「見てる人なんていないのに」

「そういう問題じゃありません！」

あまりに不慣れな対応に、吹き出した龍太郎は膝を抱えた。

「美緒ちゃん」

「はい」

「逃げられるのは今のうちだけ」

ちよっと待って！今のはどういう意味？

パニックに陥った美緒に笑いかけてから、「観覧車に行ってみる？」と龍太郎は立ち上がった。

寒い時期の観覧車は空いていた。当然向かい合わせに座るものと思っていた龍太郎が、隣に腰掛けたので驚きはしたが、「同じ景色を見よう」と言われて納得もした。

ここで、予備知識として解説をしておくと、葛西臨海公園の観覧車は、一周十七分、周囲に高い建物はなく、水平から水平までのおよそ七分間、他人の目にまったく触れないのだ。もちろん、美緒は知らずに希望を述べたに過ぎない。

密室で横に座つてると緊張するんですけど！

意識が龍太郎に向く分量だけ、美緒は窓の外を夢中になって眺めるフリをしていた。窓の外なんか見えちゃいないのである。龍太郎の顔を見られないだけだ。

「あ、ずいぶん高くまで来た」

そう言った時に、髪に指がかかった。

「美緒ちゃん、こっち向いて」

視線が絡まないよう注意して、顔だけそちらを向ける。

「下向かない、こっち」

「龍君、外見ないの？」

「ここなら、逃げられない。さっき、逃げられるのは今のうちだけって言ったでしょ？」

ますます顔があげられない。

仕方がないので、頤に指をかけて顔をあげさせる。真っ赤な顔に涙目。この顔にやられちゃったんだよな。

「採用通知、もらったから」

顔を寄せると、思ったよりも素直に美緒は龍太郎の動きに従った。触れるだけのやさしいキスをして、頭を引き寄せ、耳の熱さを頬で確認する。見えていない顔は、きっとますます上気しているに違いない。

もう一回、もう少し。

二度目のキスは、やはり触れるだけだと思っていたのだ。美緒の予測外なことに、触れた唇は角度を変えて、そのまま合わされた。驚いて思わず首を引く。

ちよっとちよっと！あたし、この後どんな顔したらいいの！

髪の間に差し込まれていた龍太郎の指は、そのまま肩に滑り降りてきてそこに止まった。力を籠められるままに、美緒の肩が傾ぐ。外の景色を見るどころではない。

やがて観覧車は下降し、龍太郎に手を引かれた美緒は、下を向いたまま公園の中を歩き始めた。

上野駅のホームで別れ、美緒は電車の中で脱力した。自分の指で唇を辿る。自分の目を覗き込んだ龍太郎の顔を思い出す。そして、繋いだ手を振り解こうとした時の、意外な力の強さ。おにぎりを出した時の笑い顔。

どうしよう。あたし、さっきから龍君のことばかり考えてる。泣きたいような気分なのだが、何故泣きたいのかはわからない。

山手線の座席に腰掛け、龍太郎は軽く目を閉じた。良い一日だったと思う。触れたのは唇だけなのに、それ以上を手に入れた気分になるのは何故だろう？

ワクワクする。どんどん近くなってく。

目を閉じたまま緩みそうになる頬をこらえ、頭を抱えた時の耳の温度を思い出す。あの耳にキスしたら、どんな顔するんだろう。悲鳴を上げて逃げるかな？

「今、仕事があがった。これからフジとそこに行くから。」

美緒が鈴森とお喋りしていたコーヒーショップに現れたのは、龍太郎と藤原だ。連れ立って居酒屋に場所を移し、落ち着いたところで後ろから声がした。

「藤原、篠田、ここ空いてるからこっちに来いよ」

龍太郎が振り向くと、何人かの同僚が座っている。三浦込みである。

「いや、今日は社外の子と一緒にいるから」

「えー？篠田君の彼女、紹介してえ。可愛いんでしょー？」

これは三浦の声だ。美緒が委縮するのが、鈴森に見えた。

「ちよつと失礼」と言いながら、美緒を化粧室に引っ張っていく。

「何、怖がつてんのよ！松坊らしくないっ！彼氏の知り合いと飲むくらい、できないの？」

「だって、あたしって龍君と似合わない気がする」

「バカ」

鈴森は呆れた口調で美緒の言葉を遮った。

「見た目だけ似合いでも、中身が似合いじゃなきゃしょーがないでしょうが。篠田さんに失礼だよ、そんなの」

「龍君より背、高いし、女の子っぽくもないし」

鈴森は盛大に溜息をついた。

「あのね、あんたは充分かわいいから。だから篠田さんがせっせと誘ったんでしょうが。どうも、そっち系の話だけイキオイがないねらしくないよ、そんなの」

だって、そう言った本人がそこにいるんだもん。さすがに、それを言うことはできない。

結局、席は移っていなかった。入れ替わり立ち代わり「篠田の力ノジョ」を覗きに来る人はいたが、概ね楽しそうに一言二言言葉を残して去ってゆく。それに卒なく言葉を返すくらいは、美緒にだってできる。藤原が手洗いに立つまで、その席は平和だった。

タイミングは確かに偶然だったのだろう。三浦が化粧室から出てきた時に、藤原の席が空いていたのだから。

「あら、篠田君ったら女の子独り占めにしてえ。私も入っちゃおうかしら」

そう言いながら龍太郎の隣に腰掛けた三浦は、やにわに美緒に話しかけた。

「篠田君がお世話になってますう。彼とつきあうのって、どんなにかわいい子だろうって楽しみにしてたんですよ」

観察するような視線に耐えられず、美緒がスカートを握りしめようとした瞬間、龍太郎の声が入った。

「かわいいでしょう。誰にもやらないもん」

「あ、惚気てえ。篠田君ってこういうタイプが好みだったんだあ」

「そ、ジャストタイプ。趣味いいだろ」

戻ってきた藤原が、横に立ちニヤニヤしている。

「俺、マルチーズとかヨークシャーテリアより、柴犬の方が好きだもん」

「あたし、柴犬？」

顔をあげた美緒に、鈴森と藤原が同時に吹き出す。

「確かに、リボンついたり服着たりしてる室内犬じゃないわ、松坊」

「三浦は猫かな、ヒマヤンかなんか」

「俺、犬派」

不機嫌な顔になって席を立った三浦の後姿を、まだニヤニヤしながら藤原が見送る。

「篠ちゃん、策士」

「人聞きの悪いこと言っな」

「気をつけて帰って。帰宅したら報告」

龍太郎と藤原が改札で手を振った後、鈴森は美緒の顔をしみじみと眺めながら言い放った。

「俺の女感、満載」

「何？」

「あの小さい彼女、篠田さんに気があったでしょ。多分イヤミのひとも言おうと思って来たんだよ。がちり跳ね除けてたけど。で、男が覗きに来た時は、わざわざ呼び捨てで牽制」

確かに、何回か呼び捨てられたような気はする。

「拳句の果てに、顔確認して『帰宅したら報告』ってもう、何？って感じ」

顔の前で手をひらひらさせる鈴森に、思わず赤くなる。

「あたし、鈍い？」

何を今更、と笑われ、美緒はひそかに落ち込んだ。そうか、鈍いのか。

その頃、龍太郎と藤原は同僚の集団に捕獲されていた。

「あれ、三浦は？」

普段、何が何でも最後まで残っている三浦がいない。

「なんかすっごい勢いで酔っ払っててー。今、タクシーに押し込んだとこ。犬がどうとかって荒れちゃって」

藤原と顔を見合わせる。三浦は多分、来週には龍太郎に近付かなくなるだろう。

「ちよつと悪かったかな？」

「しょーがないでしょ、篠ちゃんにその気がないんだから」

そろそろ帰る、と龍太郎が腰を浮かしたところで携帯が震えた。

―無事帰宅しました。鈴森も家に到着。おやすみなさい。

返信して顔をあげると、こちらを見ている顔がある。

「しあわせそー。充実したセックスしてるヤツはいいなー、俺も力
ノジョ欲しー」

・・・まだ、してないって。見通しも立ってませんで。そうは返
事できないので、曖昧に笑って返す。

「俺、女じゃなくても篠田が相手なら、いけるかも」

「あ、俺も。入社したばかりの時、ボーイッシュで好み、とか思
ったら男でがっかりした」

「・・・まとめて、殺すっ！」

酒の席でのお約束になりつつある会話は、いちいち記憶している
と翌日以降の社会生活に支障をきたす。

バレンタインが近い。

「チョコレートはいらない、メシ作って」

龍太郎の希望によりエコバッグを提げた美緒が、緊張した面持ち
で上板橋の駅の改札に立ったのは、その週末のことだった。

美緒ちゃん、それ、遠目に見ても挙動不審だから！そんなに緊張
しなくたって、いきなり何かしようなんて考えてないから！

笑いそうになりながら待ち合わせに現れた龍太郎は、「まずスー
パーだね」と美緒の手をとった。

「あ、思ったよりも綺麗・・・かも知れない」

美緒が見回した龍太郎の部屋の感想は、そんなものだ。実際は普段段床に落ちているものを、昨晚押し入れに丸めて押し込んだに過ぎない。現在、六畳プラス台所（キッチンなんて呼べるものじゃない）のアパートの部屋の中に見えているのはパイプベッドとふたり用炬燵、ビニルロッカー及び本棚兼のカラーボックスの上に置かれた小さなテレビだ。台所には小さな冷蔵庫と小さな食器棚がある。台所と並行して、ユニットバスがある。洗濯機置き場が玄関に入って靴箱の横にあるのは、スペースの問題だろうが違和感が大きい。

意外なほど、と言っては失礼だが、美緒は意外なほど手際良く料理をした。二畳の台所や小型のシンクや、龍太郎の手持ちの調理器具に文句を言いながら、慣れた包丁さばきだ。

「見縊ってた。料理できないかと思って」

「味の保証はしないよ？自分の家以外でお料理するのなんて、はじめてだから。龍君自炊しないの？」

「たまに。カレー三日間食べ続けるとか、スパゲティー茹でてケチャップで炒めるとか」

「外食ばかりしていると大きくなれないよ」

「どうせこれ以上、大きくならない」

美緒の顔に「失言」と大きく書かれたのを見て、龍太郎は頭を掻いた。

「ごめん、別に気にしてないから。しょーもないこと言った俺が悪い」

あたしが無神経なんだ、と美緒は思う。龍君が気にしているのは知っているのに、なんでそれくらいの気が遣えないんだろう。

「美緒ちゃん」

呼ばれて振り向くと、頬に軽いキスが来た。

「何作ってくれんの？すっげー楽しみ。期待しちゃおっと」

逆に気を遣ってもらってるんだ、無駄にしちゃいけない。

「レンコンのきんぴら、ナスの煮びたし、ほうれん草のあんかけ、豚汁。あと、お魚の煮付け」

ふと食器棚に目を留める。

「食器、ずいぶんかわいいね」

やべ。確かに勘はいいや。

食器は、モトカノが揃えたものである。女の子好みのファンシーな水玉がすべて二揃い、ただし茶碗は同じ大きさ。

「姉貴と一緒に住んでたことがあるからね」

ギリギリで嘘じゃない。たとえ五年前のことであっても。ふうんと納得した美緒に心の中で安堵する。他に何かないか、大急ぎで頭の中を確認する。大丈夫だ、あとは消耗品しかなかった筈。

味見、と言いながら、フライパンの中のレンコンを摘む。心配そうに窺う顔に、口移しで味見させてやろうかと考えてから、火と包丁がある場所だと思い返して止しておく。闇雲にウロウロして怒られる。

「邪魔！何もしないんなら、テレビでも見てて！」

若い女が彼氏の家で整えるにしては、ずいぶんと所帯臭いメニューが炬燵の上に並んだ。

「なんか時間が半端だね、夕飯にはちよつと早すぎるかも」

まだ夕方の五時だ。

「いいよ。美緒ちゃんも帰らなくちゃならないし、冷めないうちにいただく」

箸を口に運ぶ龍太郎を、真剣な顔で見つめる美緒がかわいい。

「旨い。きんぴら、次からもう少し辛くしてくれる？」

ほつとした顔になり、美緒も箸をとる。

「及第？次は龍君の番だもん。期待して待つてる」

あ、また部屋に来るって言った。次回の約束が嬉しい。

「カレーだけどね」

洗い物を片付けても、七時にもならない。借りてきたDVDと一緒に見る。とうもろこし畑をくりぬいて野球場にするその映画は、美緒は鑑賞したことがないものだった。だから、マグカップに伸ばした手をそのまま忘れて、画面に見入っているところを申し訳ないとは思ったのだが。

肩に手を掛けると、美緒はテレビに目を向けたまま硬直した。炬燵の脚が邪魔だ。同じ面に移動すると、とても窮屈になった。

「龍君、狭い」

文句を言う声まで硬直している。肩に置いた手に少しだけ力を入れて、顔を寄せた。

息！どうしたらいいの！

苦しくて、龍太郎のシャツの胸の辺りを握り締めた。首と背をホルドされ動くこともできない美緒は、合わせた唇を内側からなぞ

る舌に、呼吸ができない。もう限界だと思った時、緩められた唇の間から吸い込んだ息は普段の呼吸と違う音階で、龍太郎のシャツを握る手にますます力が入る。

こんなキス、知らない。

舌は探るように深くなり、背に回った手が巻きついた後、唐突に離れた。

「びっくりした？」

呼吸が整うのを待ちながら、龍太郎は美緒の頭を自分の肩に引き寄せた。多分、今、涙目。

「これ以上すると、ストップが効かなくなっちゃうから、今日はここまで」

ぎよつとした気配があり、腕の中がたじろぐ。

「伸びちゃう」

「え？」

「そんなに掴んでたら、カットソーが伸びちゃう。俺の服、全部ネツトで取り寄せなんだからね」

自分の手が力いっぱい握りしめていたものに気がつき、美緒は慌てて手を離れた。視線を落すと、龍太郎の胸から下にかけて、思い切り良く掴んで引つ張った皺がある。ケンカで胸倉を掴まれたようでもある。

「・・・伸びた。ごめんなさい」

顔を見返す勇氣はなく、美緒はそのまま龍太郎の肩に額を当てていた。

「次から、引つ張れないように脱ごうか？」

声にならない悲鳴を上げて美緒が飛び退くのを見て、龍太郎はこらえきれずに吹き出した。

あつという間に時間はすぎて、九時近くになる。「駅まで送るか」と龍太郎はM A - 1 に袖を通す。

もう一回、キスが欲しい。

皺だらけになった龍太郎のカットソーを見ながら、美緒もコートを手織る。そんなことを頭に思い浮かべる自分と、それを恥ずかしいと非難する自分がいて、どちらにしろ口になんか出せっこない。床からバッグを拾い上げると、龍太郎が驚くほど近くにいた。ボタンを留めていないコートのウエストから腕が入る。

息継ぎに余裕ができた。美緒の手はそろそろと龍太郎の背に回り、気がつくと指に力が入っている。

「こんなことしていると、キリないね。土曜日はバスの本数、少ないんでしょ？」

駅まで手を繋いで送ってもらい、改札で手を振る。空いた電車の座席に座った美緒は、目を閉じて一日を反芻する。そして、唐突に気がつく。

・・・なんか、すつごく慣れていたような気がする。

やっぱり今まで考えたことはなかったのだが、龍太郎はその経験があるのだということに思い至る。今まで恋愛をしたことのない人だと思っていたわけではなく、ただ結びついていなかっただけだ。そして、聞いた時にはピンと来なかった「ストップが効かなくなる」は、何に係った言葉か。つまり、あのキスってというのは。

きゃーっ！

顔色が弾けたところで、電車は乗り換え駅に停まった。

ああっ！あたしって本当に鈍い！

胸の部分が握られた形になったカットソーを見下ろしながら、ス

ウェットに置き替えた龍太郎は、冷蔵庫からビールを取り出した。

ぜんっぜん物慣れてなくて、だけど一生懸命で。

洗ったまま伏せてある鍋を見る。目玉焼き用のフライパンとアルミの鍋で、あれだけの料理ができるものかと妙に感心する。胃袋でも、結構掴まれちゃったかも。普段の動きだけを考えれば手際の良さに頷くこともできるし、実際骨惜しみしない性質だろう。おそろく仕事も早いんだろうな、と予測はつく。すべて引き受けてしまうあぶなっかしさと紙一重だが。

ゆっくり大切になっていくといい。焦って台無しにはしたくない。ビールのを口に運びながら、中途半端に見たDVDをセットしなおす。抱きしめた時、良い匂いがしたのを思い出した。充分女の子らしくて、かわいいじゃないか。

何をしたら、もっと笑う？何をしたら、揺るぎなく俺のものになる？

美緒が龍太郎の部屋に入るのも三回を数え、キスの最中の息継ぎに慣れてからの話だ。(注)好事魔多し)

地下鉄の階段に見えた時に、テンポが違うとは思った。だから龍太郎は階段の上で、美緒を待っていた。

「龍君、おはよ」

「具合でも悪いの?」

「悪くないよ?昨日古い書類処分したら、今日はちょっと腰の調子が悪くて」

えへへ、と美緒は笑った。

「重いもん持ったんだろ。なんで手伝ってもらわないの?」

「みんな、それぞれ仕事があるもん。自分の力でできることに手を貸してって言うのも」

「美緒ちゃんがフルパワーでやらなくちゃならないことでも、男の力なら『ちよつと重い』でできちゃうんだよ?腰痛めてまで、そんなことしない」

美緒の頬がぷくつと膨れたので、つついてやろうかと手を伸ばしかけた時、後ろから藤原が真ん中に割り込んだ。

「はい、篠ちゃんも松山さんも朝からイチャイチャしたら犯罪。松山さん、篠ちゃんは俺のものよ?」

「いつから?」

「入社研修の時に、押し倒されてくれたじゃないの」

確かに蹲った相手に蹴りを入れようとした時に、上から押さえつけられた記憶はある。

「・・・古いこと思い出させんなバカ」

実は、マジで痛いのだ。無理をしなければ良かったな、とは思う。

書類箱を棚に上げた時、確かに違和感を感じた。腰に負担をかけないように、美緒はそろりそろりと着替えて仕事をはじめた。

今日、仕事が終わったら整体にでも行ってこよう。

キーボード操作をしていても、座っている態勢がきつい。かと言って立ったままでも痛い。同じ部内の事務に、お茶汲みだけは変わってもらった。

「松山さん、見積りお願い」

課長の席から声がかかり、立ち上がるうとした瞬間だった。
ぐき。顔が歪んだ。

どうしよう。姿勢が戻せない！

机を伝い歩いて課長の席まで行く。資料を受け取った時は息も絶え絶えだ。

「どうした？歩けないのか？」

「いや、なんか腰やつちやったみたいで。大丈夫です、帰りに病院に行くし」

「それまで持たないだろう。おい、誰か車出してやれ。松山を整形外科まで連れて行け」

大木がキーフックから営業車の鍵を外し、女子社員がロッカーから美緒のバッグとコートを持ってくる。財布をデスクの引き出しからバッグに入れ、大木の首に腕を回して、美緒はエレベーターに向かった。

幸いなことに、大木の営業車は地下の駐車場に入っていた。

「ごめん。仕事中的なのに」

「他ならぬ松山さんのためですから。午前中の納品、ちょうどないしね」

大木の首にぶら下がったままの移動である。ひとりで歩くのは、あまりに辛すぎる。

「松山さん、胸がないから抱きついてても違和感ないし」

「セクハラ！・・・声張っただけで痛い・・・」

ヘルメットと営業鞆を持った龍太郎が作業着姿で駐車場に降りた時、絡まりながら歩く男女がいた。なんだあれ？と、そちらに目をやると、男の方は見たことのある顔だ。首にぶら下がった女の腰を支えながら歩いているらしい。

病人でも出たのか？

顔を確認して、ぎよっとする。自分の彼女だ。

「美緒ちゃん！」

「あ、龍君。腰、やつちゃった・・・病院行つて来る」

自分の彼女は他の男の首にぶら下がったまま、世にも情けない顔をした。

はつきり言つて、この体勢は心穏やかじゃない。相手の男は自分の彼女の腰を支えながら、「松山さんにお世話になってます」とか言うのだ。

「肩、変わりましたようか？」

龍太郎が大木に申し出ると、大木は龍太郎を見下ろした形で返事した。

「失礼だけど、無理でしょう？自力で立つてられないんだから、上から支えてないと」

瞬間、頭に血が上るのをこらえる。痛いのは、美緒なのだ。そして、大木の言うことは尤もなのだ。

「すみません。よろしくお願いします」

頭を下げて、自分の営業車に向かう。振り向くと、美緒と大木がノロノロと駐車場の中を進むのが見えた。

ちくしょうっ！

「松山さんの彼氏、すごい顔してたね」

後ろの座席に美緒を押し込んだ後、バックミラーを調整しながら大木は言った。腰に負担がかからない形をもぞもぞと探りながら、美緒が聞き返す。

「なんでって、自分の彼女が自分の目の前で他の男に抱きついてたら、面白くないでしょうが。なんか俺、松山さんの彼氏に悪いことしたかも。謝つといて」

「いや、悪いのはあたしだし、大木君は不可抗力・・・いてて」

「痛がり方まで、色気ない」

「うるさいっ！・・・いて。声出すと、余計痛い」

「俺は松山さんの彼氏に同情する」

整形外科の受付まで大木に肩を借りて別れ、痛み止めを処方された美緒はよろけながら帰宅した。手を付きながら階段を上ってベッドで丸くなる。龍太郎へ明日は安静、と診断結果をメールした時には、大木に言われた「すごい顔してた」はすっかり頭から抜け落ちていた。

龍太郎からの返信は、「無理しないで治しなさい」だった。メールで顔は見えないし、声の調子もわからない。だから、頭から抜け落ちてしまった事柄に、龍太郎がどんな顔をしているかなんて、美緒は想像もつかない。

どちらにしろ、想像はつかないかも知れない。龍太郎は嫉妬に苦しんでいたのではないのだから。

失礼だけど、無理でしょう？

はい、そうです。その通りです。女の子が目の前で具合を悪くしても、俺は運んでやる事ができません。背負うという行為はできるかも知れませんが、背ではなく首にでも乗せないと、引き摺る形になります。でも、それは俺が望んだことですか？

身体が小さい分、他で挽回するしかないと思っていた。負けを認めるのはキライだから、自分が勝てない土俵では、他の何かができるとアピールしてきたつもりだ。

ああして、できないことを見せつけられるんだ。身長基準でジエータイやケーサツに入れないのと同じように。

「あれ、もう大丈夫なの？」

「うん、痛み止め貰ってるし、昨日動かさなかったら、ずいぶん楽」
「気をつけてね。大変なことは手伝って欲しいって言っても、誰にも責められたりしないんだから」

通勤時に手を繋いだりはしない。並んで歩いているだけだし、どちらかの会社の人間が混ざって、途中で離れることも多い。

龍君、なんか変。あたしの顔を見てくれない。

「今日も早く帰りなさいね、腰痛は後引くから」

はい、と小学生のような返事をしてから、美緒はもう一度龍太郎の横顔を覗き見た。やはり前を向いたままで、美緒の方を見ない。何か、怒らせるようなこと、した？

夜にメールを数通やりとりして、龍太郎は炬燵に足を入れたまま、目を閉じた。

彼はね、包んでもらってるって実感できる人なの。龍太郎君にはやさしくしてもらったけど、私は心だけじゃなくて、実際に蹴って

もビクともしない人が好きになったの。だから、ごめんね。

美緒もいつか、そう言い出すかもしれない。彼女はおそらく、他の男を知らないんだから。俺じゃない相手がいるんだって自覚したときに、他の相手がたやすく差し出せるものを、俺は持っていないのだと気がつく。

その時に、何が言える？

――風邪気味だから、明日は家で寝てます。

土曜出勤の現場が終わったあと美緒に送ったメールは、半分くらい嘘だ。

今、笑えないから。開き直った筈のことで、こんなに落ち込んだの久しぶりだから。

暖かくして寝ているようにと返信が入ったのを確認して、携帯のフラップを閉じた。ごめんね、と思う。情けねえな、と思う。深く溜息をつく。

大丈夫、来週には復活するから。

「おはよう。風邪、ひどくならなくて良かったね」

「一日中寝てたから。今週はちよつと忙しいから、休めないしね」

メールでも電話でも、そんなに変わってないのに。何か変だよ、龍君。

「今週、定時上がりできる日、あるかな」

「ちよつとわかんない。そういう日はちゃんと連絡するから」

あたし、何かした？

仕事帰りに鈴森とお茶を飲みながら、美緒は「龍君がね・・・」と切り出した。状態だけを聞いていた鈴森は、ひどく不審げな顔をする。

「飽きた・・・わけないか。まだ、なんにもしてないんでしょう？それとも、頑強に拒んでるとか」

「なんにもつて、何を！」

「したの？」

「してない」

いつからだっけ？と思い返して、思い当たった。

「腰をやっちゃった日からだ。あの時駐車場で会ったけど、その後一緒に出てない」

「あれ、寄りかかってっつていうより、抱きついて歩いてなかった？それ見られたの？」

「じゃないと動けなかったんだもん！ちゃんと龍君にもそう言ったし！」

鈴森は額に手を当てた。

「嫉妬は理屈じゃないのよ、松坊。しみじみ篠田さんが気の毒だわ・・・でも、放つとくとこじれるよ。現に篠田さんの様子がおかしいんでしょ？こじれっぱなしに、ならなければいいけどね」

翌日の朝、駅からの道で美緒に声をかけたのは、大木だった。

「松山さん、今日は彼氏と一緒にじゃないの？」

「今日は現場直行なの。最近、ちょっと忙しいみたい」

「昨日駐車場で会ったよ、六時頃。丁寧にお礼言ってもらっちゃって。見た目があなのにおトナだね、あの人。俺なら、自分の彼女が抱きついてた男になんて挨拶しないね、緊急事態でも」

美緒は驚いて、大木の顔を見上げた。

「そんなもの？」

「そんなもんだよ、男って嫉妬深いし。それに俺、あんたの身長じや無理だ、くらいのこと言っちゃったしね」

そんなこと言ってたっけ？美緒は急いで記憶を探る。

言ってた。そうだ、自分の腰に氣をとられてて、すっかり忘れてた。

「何？フォローしてないの？あの時、すげえ顔してたのに」

してない。ってか、きれいさっぱり抜けてた。だって非常事態だったし、その後のメール、普通だったし。

「あんまり迂闊だと、逃げられるよ。ただでさえ性的魅力に欠けるんだから」

「余計なお世話！」

大木に言葉を返しながら、美緒は龍太郎の横顔を思い出していた。もしかして、怒ってる？あたしが、鈍いから。

美緒が昼休みに龍太郎に送ったメールへの返信は来なかった。別に、怒っていたわけではない。それどころか、現場打ち合わせの際に「篠田さんが担当で助かったよ」なんて言われて、回復に向かった龍太郎は、週末の予定なんか考えていたのだ。返信しなかったのは何のことはない、個人用の携帯電話を家に忘れてきたからだ。作業用防寒ジャンパーのポケットが普段のコートと違うので、内ポケットに入れたつもりで忘れた。早あがりであれば美緒の会社を直接覗けばいいや、それくらいの気分だった。もちろん、頭が一杯になっってしまった美緒のことなんて、知らない。

夕方までメールの返信が来ない。定時過ぎに電話しても、出ない。美緒は、泣きたくなっていた。悪い予想ばかり膨らみ、連絡が取れないことで妄想に拍車がかかり、私服に着替える頃には「龍君は怒っているから電話に出てくれないんだ」と、頭に完全に刷り込んでしまっていた。

あたしが気を遣えないから、龍君は怒ってる。

ここで誰かに聞いてもらえば、「急にそんなことになる筈がない」と否定してくれるだろうが、美緒は行動が早いのである。

最初、本館の五階に顔を出そうかと思った。しかし、現場から直帰の率も高く、受付で呼び出してもらう勇氣はない。

家の前で待つてよう。怒ってるんなら謝らなくちゃ。

美緒が龍太郎のアパートの前に立ったのは午後七時、まだ部屋に灯りは点いていなかった。

ちょっと早い時間かも。

携帯電話を呼んで見る。当然、出ない。電車の中かも知れないと思ひ返し、駅に戻って改札で待つてみる。しばらく待つていると、

どこかですれ違ったのかも知れない気になって、アパートに戻る。その合間に携帯も呼んでみる。それを何度か繰り返した。

なんで、電話に出てくれないの？あたしの声なんか聞くのもイヤ？完全に妄想に支配されてしまっても、誰もそれを知らないのだから、止めてくれる人はいない。美緒の頭の中にはとんでもない結末が構築されつつあり、パニック寸前で龍太郎のアパートの外階段に座り込んだ。一時間半が経過したところだ。

一方、コンビニで夕食を買いこんだ龍太郎である。自前の携帯電話は家なので、電車の中の暇つぶしに駅で貰ったフリーペーパーの「お出かけ情報」を、家で検索してみようと足取り軽く帰ってきた。どこかで見たような。

アパートの外階段に蹲っているコートに見覚えがある。

「美緒ちゃん？どうしたの？」

顔をあげた美緒は、泣きだす寸前の顔だった。

「ごめんなさい！怒らないで！」

「・・・はい？何のこと？」

冷えてしまった美緒を炬燵に入れ、インスタントコーヒーのマグを差し出す。

「何も怒ってないよ？どうしたの、急に」

「だって、龍君先週からずっと変だったし、今日も電話に出てくれないし」

「電話、家に忘れたんだ」

美緒は驚いた顔をした後、急に天板に額をつけた。

「良かったー・・・あたし、龍君が何か怒ってるんだと思って。あたしが何かしたのかと思って」

俺が俺の感情で手一杯になっている時に、この子はそれを自分の不首尾だと思っていたのか。

「ごめん。ちよつと落ち込んでただけ」

「何かあったの？」

返事の変わりに肩を引き寄せると、また緊張する気配が伝わる。

「もつと力抜いてくればいいのに。俺、怖い？」

そのまま抱き寄せると、まだ冷えている肩が大きく深呼吸した。

「怖いんじゃないってね、ドキドキする」

「この間、男の首に腕を回してたじゃない。あれは平気なの？」

ぱつと身体を離れた美緒は、不思議そうな顔で龍太郎を見た。

「だって、あれは大木君だよ？ドキドキなんかするわけじゃないじゃない。杖とか歩行器にドキドキする人はいないでしょ？」

「へ？」

間抜けな声が出た。

「男らしくて頼りになるとか」

「何で？大きくて筋肉質な人って、男らしいの？スポーツ選手なん

て女の人でも、ほとんどあたしより大きくて筋肉質だけど」

「なんか、手応えがヘン。」

「俺、チビだしさ、好きな女の子が具合悪くても運んでやれないし。情けねえって」

「落ち込んでたのって、そのことだったの？」

炬燵の同じ面に窮屈に座りながら、美緒は自分から龍太郎の手を握った。

「ごめんね。あたしが不用心だったただけなのに」

「じゃなくってさ、男としてって言うか」

「あたしのお父さんも、お母さんのことなんて運べないよ？」

「へ？」

また、間抜けな声が出る。

「あたしのお父さん、胃が悪いからずっとく痩せてるの。お母さんが寄り掛かったら、多分転ぶ。だからって、頼りたくないもん」

大真面目に主張する美緒の顔を見る。慰めやいたわりではなく、本当にそう思っていることを発見する。笑いがこみ上げてくる。

この子は今、すごい破壊力のある事柄を口に出したって理解してるんだろうか。

まったくこの子は、俺のコンプレックスなんて、なかったものにしちゃう。

握られた手を逆に掴みなおし強く引いてから、びっくりした顔にキスをする。頬、目蓋、唇、とキスが続き、少しずつ逃げようとする顔を追っているうちに、美緒の背は床に着いた。

キスが深い。もう、後ろには逃げられない。背にまわす必要がなくなつた龍太郎の腕が、美緒の顔の横に置かれている。時折、やさしい手が髪を撫でる。今までのキスと違う。やだ、怖い。でも。でも、もっと触れて欲しい。

息継ぎのたびに乱れてくる呼吸が苦しくて、美緒は龍太郎の肩にしがみついた。やつとはずされた唇は、次に頬に触れて耳の下に落ちた。息遣いを耳元を感じる。

乱れた呼吸に混ざる自分の声に驚いて、美緒は自分の指で自分の口を塞いだ。そうしている間に、龍太郎の指がニット越しに胸を確認していく。

熱くなつた頬を確認して、顔を見た。赤く上気した顔がかわいくて、もっとその顔を見たいと思つた。俺もドキドキする。口を塞いだ指の一本一本にキスした。俺だけが見る顔。

胸のふくらみを押さえてみる。余裕なんかない、もっとキスしたい。やべ、抑えが効かないかも。

龍太郎の指は胸からニットの裾に到着する——ところだった。
(（注）だから、甘いつて)

ぱち。美緒は突然目を見開いた。自分が今、薄いニットの下につけているものを、唐突に思い出したのである。

ここで美緒の名誉のために、付け加えなくてはならない。彼女は腰を痛めたばかりであり、保温の必要がある。そして、今日は龍太郎の部屋に訪れる予定はまったくなく、ましてこんな展開なんて三十分前ですら予測できていない。

あたし、腰までのババシャツ着てる！遠赤外線保温の！
そう、彼女が着ているものは、カジュアルメーカーのヒートなん

たらの薄いインナーではなく、スーパーマーケットの下着売り場で購入した、胸に伸縮レースのついたベージュの肌着であった。ジーズの下には、海賊の暴れまわる漫画の中のキャラクターであるトナカイの絵のついたニットのオーバーパンツ、平たく言うとも糸のパンツだ。

「ちよつちよつ！ちよつと待って！だめっ！」

時ならぬ色気レスの声を責めては、気の毒というものだ。

あれを見られるくらいなら、荒川流れて帰れって言われる方がマシ！

呆然とした龍太郎を押し退け、美緒はコートを羽織った。

「バス、まだ間に合うから！急に来てごめん！帰る！」

慌てて靴を履いている。

「ちよつと待って、送ってくから」

「大丈夫、まだ遅い時間じゃないから！」

呆然とした顔のままの龍太郎を玄関に残して、美緒は走り出した。送ってもらったって、どんな顔ができるっていうの！

be happy / Lovers! 1

ちょっと焦っちゃったか？

龍太郎は遅い夕食を済ませた後、美緒の突然の慌てぶりを思い返した。そのまま先に進んでしまいそうな気もしていたが、別に無理強いするつもりはない。拒まれればまだ引き返せる段階ではあったけれど、受け入れてくれる雰囲気にはなっていた筈だ。自分がそう思い込んだだけだったんだろうか？

首筋まで上気した色を思い出す。必死でしがみつく手が、背中に感触を残している。

「いや、本当はすっごくしたいんだけどね」

炬燵布団を直しながら、独り言が口をついて出た。自分だけがそう思って、実際そうなった場合の空々しさは願い下げだ。そんなことにはしたくないし、時間をかけるのは苦痛じゃない。

俺の鍵を持っているのは、あの子だから。

電車をひとつ乗り換える時に、美緒はやつと空腹に気がついた。

駅の売店で買ったシリアルバーを齧りながら、電車を待つ。

よかった、龍君が怒ってたんじゃなくて。それどころか、あんなやさしい顔で――

うっ！あたし、動転して変なことした気がする！

口の中で砕いたシリアルが、喉に詰まってむせた。咳込みながら、電車に乗る。自分のことながら、あれは著しく風情に欠ける振る舞いだったと思う。絶対、急に嫌がったように見えた。

ごめんなさい、龍君がイヤだったんじゃないんです！怖いとは思っても、逃げたいとは思いませんでした！でも、ババシャツ！

その週の土曜日に一緒に映画を見に行っても、龍太郎と美緒は手を繋いで歩いただけだった。その次の週に待ち合わせした時も、龍

太郎の部屋へ行くなんて話にはならず、建物の陰でこっそりキスしただけだ。もしくは、会社帰りのビルの緑地帯で。

次に密室でふたりきりになった時に、龍太郎は自制心に自信がなかったのである。ゆっくり時間をかけて感情を育てたい、なんてのは頭の中だけのことだと知っているから。

「そりやまた、ずいぶんむごいことを・・・」

しょぼくれてるねーと誘われたコーヒーショップで、鈴森は呆れた顔をしてみせた。美緒の顔は今、羞恥心満載である。あの場合、どうしたら良かったの？

「まあ、松坊らしいっちゃ松坊らしいけどね。まー、篠田さん気の毒」

気の毒がられるようなこと、しちゃったんだ！

本当は、キスしたい。唇を触れるだけのキスじゃなくて、あの――

「そのあと、お家に誘ってくれないんだもんー」

情けない声が出た。自分から「ふたりきりになりたい」なんて言えない。このタイミングで言ったら、「次の段階に行きたいんです」と言っているようなものだ。

次の段階っていうのは、つまり。

「まさかと思うけど、まだ？」

沈黙が答えだ。藤原の信じられん、という眼差しがウザい。

「つきあつて、どれくらいになる？」

「かれこれ四ヶ月は過ぎた」

手を繋ぐだけのデートが、二ヶ月近く続いていた。もちろん一緒に
に出掛けたり食事したりするのは、楽しい。やっと自己主張をはじ
めた美緒が、どこに行きたいの何を見たいのと嬉しそうに言う。そ
れはもうささやかに、桜まつりで甘酒を飲むことだったり、青山界
隈で買いもしない骨董品を眺めるだけだったりするのだが。好きな
女の子の手を握って、最近ますますかわいくなつた表情を見て、隙
あらばキスしちゃったりしてるのだ。楽しくないわけがない。

けれど、満足してるわけでもない。っていうか、きっぱり不満。

タイミングを外してしまったのだ、とは思ふ。突然逃げた美緒を
怯えさせたくなくて、少し引き下がった。少し引き下がった筈が、
次の一步の踏み出しどころがわからなくなつた。他の相手ならば、
なし崩しのなあなあで元の位置に戻るのだが。

いかんせん、相手は美緒だ。雰囲気を読む力はない。きつかけが
きつかけなだけに、部屋になんか呼ぶと「やらせろ」と言っている
ように見える気がする。いやだから、無理になんて言わないって。
だけど、一生このまま？それは、カンベン。

「高校生か」

鈴森の思いつきり呆れた視線に耐えかねて、美緒は下を向いた。

キスしたいの、なんて相談を持ちかけたわけではない。鈴森の彼
氏は確か自宅勤務の筈で、みんなどこでキスしたりベタベタしたり
してんのかな、なんて聞いたのが最初だった。

「車の中とかホテルとか？松坊のどこ、篠田さんはひとり暮らしじゃない。場所になんて困らないでしょ」

龍太郎が部屋に入れることを躊躇している原因は、自分だということを理解はしている。美緒が怖がっていると思いきんできいることも、察しはついている。違うの！と声高には言えない。

「あの後、お部屋に行つてない・・・」

「あのつて、ババシャツ？冬の話じゃない。もうじき、五月になるよ？その後進展してなかったの？」

やはり、沈黙が答えだ。ただし、美緒の顔はテーブルの表面に張り付いていた。

「やつぱりあんた、八十の処女になるような気がする・・・」
「不吉なこと言わないで！」

すでに「あーんなことやこーんなこと」への覚悟は決まっているのだ。もっと近付けば、もっと好きになるという確信がある。にもかかわらず。

どうしろっていうの、この先！

確かに、それは美緒の不注意だった。営業から指示された見積の掛率が低い、と思っではいた。確認する前に営業は外出してしまっただので、とりあえず見積書を作って、後でもう一度確認しようと思いい、そのまま忘れた。

その見積書を至急FAXして、と電話で指示された時に「チエツクしなくても良いですか」と一度聞きなおした。

「松山さんのこと信頼してるからさ、よろしく」

もういちど、見直せば良かったのだ。普段の掛率よりも5%も低い、その数字を。

いつも通り課長の席から判を持ち出し、承認者のメクラ判をついた。そして取引先にFAXを流して、そのまま営業の席に置いた。普段の一連の流れだ。

「なんだ、この数字」

その営業の席にある見積書を目に留めた課長が、それを持ち上げた。

「あ、今FAXしたところです。出先から指示があつて」

「原価で卸すって？メーカーから特価出てるのか、これ？」

「えっと、伊東さんがそうやってメモくれたんですけど」

営業から預かったメモを渡す。@マーク付きの数字の横に、小さく×3、と書いてある。見積書を作っているときには、気がつかなかった、つまり、見落としたのだ。

「3パー乗せろって書いてあるじゃないか」

美緒の顔から、血の気が引いた。

電話に向かってペコペコ頭を下げて、ついでに担当営業と課長からも詫びを入れてもらい、取引先からはぎゃあぎゃあ文句を言われ

てコトは収まった。そのまま通してしまっても、被害総額は十萬程度だった筈だが、前例を作ると次の交渉が煩い会社だった。だから、課長の怒りは尤もでもあった。

ただセクシユアル・ハラスメントに近かったことは、よくあることと言えばよくあることもある。

「松山さん、最近浮かれてるんじゃないの？彼氏と一緒に出勤なんかしちゃってるっていうし、頭が花盛りなんじゃない？早くお嫁に行けば？」

美緒の会社は、今時珍しい結婚退職推奨の会社だ。嫁に行け、即ち辞めてもらっても構わない。

課長も腹立ち紛れに口にしただけで、本気でそう言ったわけでもない。それはわかつている。わかつてはいても、自分のミスでないトラブルを作った美緒には、痛かった。

定時はとづくに過ぎていた。ロッカールームに女子社員の姿はない。気が抜けたところで半ベソになった。

あたしがミスしたから、みんなに迷惑掛けた。

会社組織の中で部下の失敗を上司がフォローするのは当たり前だが、他人よりも自分を動かした方が早い性質の美緒は、他人に頼るのに慣れていない。着替えながら、自信がどんどん萎んでいく。やだ、こんなのあたしじゃない。

龍君の声が聞きたい。きっと、それで元気になる。

携帯電話を呼び出すと、すぐに龍太郎の声の応答があった。

「まだ仕事中だよ、今日は遅くなりそう。どうしたの？声に元気がないね」

声が聞きたかっただけ、と明るく言うつもりだった。それで元気になると思っていたのに、声を聞いたら泣きたくなった。この声は、少なくともあたしを責めたりしてない。だから、もうちょっと。

「頭、撫でて。それで元気になって帰るから」

本館五階の踊り場で待つて、と指示があつて、美緒は薄暗い階段に腰掛けた。仕事の邪魔をしまして申し訳ないと思う一方で、こんな顔してるところを見せちゃつていいのかなとも思う。

なんでこんなに落ち込んだんじやつたんだろ。前に同じような叱られ方しても、自分でどうにかできたのに。

重い鉄の扉が開き、軽い足音が階段を降りて来る。

「どうしたの？何かあつた？」

仕事、中断させるような用件じゃなかったのに。

「ごめんね。ちょっと失敗して落ち込んだだけだったの」

くしゃ。階段に座つたままの美緒の髪に手が差し込まれた。くしゃくしゃやくしゃ。龍太郎は黙つたまま、髪だけかき混ぜている。

忙しいとこ、そんなんでつて怒つてるかな。

美緒は上目でそつと表情を窺つた。そして、えーと。この顔つて、何？どこからどう見ても。

「龍君？」

龍太郎の顔に浮かんでいるのは、極上の笑みだった。

更に髪をかき混ぜながら、龍太郎も階段に腰掛ける。座つたついでに、フットボールのように美緒の頭を胸に抱えた。抱えられた頭がジタバタしている。美緒の髪はもう、ぐしゃぐしゃだ。

やつとのことで頭を引き抜いた美緒が膨れる。

「もうっ！ふざけてっ！」

憂鬱は見事に吹き飛んでいた。

「ふざけたわけじゃないよ」

「落ち込んだのにっ！仕事だから、ちょっと顔見て帰ろうと思つて」

続きの言葉よりも、龍太郎のキスの方が早かった。

「嬉しいんだもん」

美緒の問い返す視線の先には、まだ上機嫌の龍太郎の顔がある。

「落ち込んだときに俺のこと思い出して、会いたいつて思ってくれるのが嬉しいんだもん」

うわ、キザ！何赤くなってるのよ、あたし！

ひんやりした階段に並んで腰掛けたまま、龍太郎は美緒の肩を抱いていた。美緒も龍太郎の肩に頭を乗せる。この距離がいい。体温を感じる距離。

「さて、元気出た？そろそろ仕事に戻らないと」

立ち上がった龍太郎と一緒に、美緒も立ち上がる。美緒の背に一度両手をまわし、龍太郎は力を籠めた。

「このまま時間気にしないで、こうしてたいんだけどね」

賢い柴犬は、自分の安心できる場所をちゃんと知っている。やっ
と首輪をつけた。もう、俺が飼い主。

「うん。ごめんなさい。ありがとう」

別れ際にもう一度短いキスをして、惜しがりながら手を離す。

「龍君、好き」

「知ってる」

なんで仕事に戻れなくなるようなタイミングで、それを言うか。踊り場で上下に分かれ、鉄の扉を押した後に、龍太郎は手洗いにいった。鏡を見るためだ。席を空けた後に口紅を残して戻ったら、シャレじゃすまない。ついでに用も足して、手を洗っていたところに出先から同僚が戻ってきた。

「お、今、篠田の彼女とロビーですれ違ったよ」

あ、そう、とやり過ぎす。

「なんか、すっげーかわいくなつたよね。急いでたんかな、すげー早足で」

「いや、それは普通の彼女の歩き方」

かわいくなつたって思ってるの、俺だけじゃないんだ。それは、面白くないぞ？早足ってことは、いつものテンポに戻ってるんだ、良かった。

「ニヤけんなよ」

「ニヤけてねーよ」

帰宅時間を見計らって、美緒はメールを入れる。

― 気力回復。甘えちゃってごめんなさい。

― もっと甘やかしたい！

間髪入れずに戻ったメールに、絶句する。うう、対応に困る。

そういうこと、言う人なんですか？

言う人なんです。おイヤでしょうか？

いつだっけ？ずいぶん前の会話。今なら、ちゃんと答えられるのにね。リアクションに困るだけです、イヤじゃないです。ああ、そうか。あたしと龍君は、そんなやりとりが必要ない程近くに来たんだ。

きっかけを作ってくれたのは、龍君だ。あたしはいつも、作ってもらったきっかけに乗っかってただけ。そして、今も次のきっかけを作ってもらうのを待ってる。全部、龍君まかせで。それで、いいの？

四月も終わり近く、外をそぞろ歩くには良い季節だ。公園の木の陰で、やっとベタベタできるな！なんてお互いに思っていて、それを口に出すのはちよつと・・・の状況で、だけど肩をつけて座っているのが嬉しい。

だあれも見えてない。キスしちゃっても大丈夫。

熱心にキスしているうちに、龍太郎が足を組みはじめた理由など、美緒に知る由もないが。

「帰らないで」

耳打ちのように言われた言葉に、美緒の肩はびくつと震えた。

「困る」

やっぱりか、と内心溜息をつく龍太郎は、「無理ならいいんだ」と努めて普段の声を出した。

やばい！これ、また絶対誤解する！龍君、きつとがっかりする！美緒のうなじを撫でる龍太郎の指はやわらかく、それだけでも充分大切にされているのだと実感できる。自分ももつと近くに行きたいつて、ちゃんと伝えたい。でもね。

あたし、男の人にこれを言ったこと、ないんだけども。体育の先生にすら言ったことないんだけども。

「・・・生理」

一瞬黙った龍太郎は、その後笑いだした。

be happy / Lovers! 6

ゴールデンウィークだから少し遠出しよう、そう言って早い時間に待ち合わせた。

「横浜に行つて、肉まんでも食べる？」

「あたしのイメージって、それ？」

尖った唇を引っ張ってみたい衝動にかられて、龍太郎は自分の手に、いけないと言ひ聞かせた。

「『たぬきや』の鮪丼を食べる人」

「そればかりじゃないっ！」

「じゃ、荷物を肩に担ぐ人」

「最近、ちゃんと手伝ってくれって言ってるもん。じゃなくって、なんかこう、もっと上品な」

「こつちがその気になつてゐる時に生理の人」

「それってあたしのせい？」

なんとなく、含みのある言葉ではある。

結局横浜まで出て、山下公園で肉まんを食べていたりする。潮風はもう、夏の気配だ。赤レンガに行くか元町をウロウロするかと話し合い、立ち上がって海を見ていた時。

今、言わなくちゃ。勇気出せ、あたし！

隣に立つ人の俄かに緊張した気配に、龍太郎が注意を向けた。

「今日ね」

「何？」

言っ……言えない！

海に向かつて唇を噛みしめ、下を向いた美緒は耳まで真っ赤だ。

「何？どうしたの？」

顔！顔覗きこまないで！余計に言えない！手の平で顔を覆ってみる。熱い。

龍太郎の慌てた気配が伝わる。ごめんなさい、今言います。

「今日、友達と旅行するって言って家出てきた！だから、帰らない！」

一息に言いきって、膝を抱えて顔を隠した。美緒の横に立つ龍太郎の動きが止まっている。

ああ、やっぱりおかしいこと言った！と後悔しはじめた時、頭上から手が伸びてきた。美緒の髪を乱暴にかき混ぜている。目だけ上げてみる。手の主は海を見たまま、身体だけを傾げている。

美緒の髪が台風にでも巻き込まれたかのように乱れた後、上から声が降ってきた。

「そういうこと、言う人だったんですか？」

このフリーズへの答えは、あらかじめ提示されてる。記憶にある。

「言う人なんです。おイヤでしょうか？」

もう一度髪が乱暴にかき回された後、平手が小さく美緒の頭を打った。

「まったく！俺が言うつもりだったのにっ！」

ほら立って、と肘を持って美緒を引き上げた。耳まで真っ赤な顔と涙目、この顔ははじまりの顔だ。パワフルで恋愛感情だけに疎くて、俺にとっては誰よりも女の子らしい女の子。

「赤レンガの方に行ってみようか。俺の部屋に置いとくカップ買おう」

フジのマグとか、間に合わせのカップじゃなくて、美緒専用のカップを食器棚に並べよう。気持がちょっとずつ寄り添ったみたいに、今度は生活の中にちよつとずつ美緒の色がつくといい。

手を繋いで歩きだした龍太郎と美緒を、潮風がふわりと祝福した。

f
i
n
.

b e h a p p y / L o v e r s ! 6 (後書き)

最後までおつきあいくださって、ありがとうございます。

ベタなラブコメを、ここまで引っ張って申し訳ありません。

もしも気に入っていただけたなら、感想や評価をいただけると、とても嬉しいです。

そして次回もおつきあいいただければ、こんなに嬉しいことはありません。

実はもう少々ベタベタさせたいのですが、「あーんなことやこーんなこと」をここにアップすることもできませんので、ムーンライトの方に場所を移します。

もし興味を持っていただければ、龍太郎と美緒のその後を覗いてやっってください。

おまけ。 (前書き)

急に割り込ませて済みません。

「あーんなことやこーんなこと」に行きつく前の、ある日のデート風景です。

本編以外のエピソード、ひとつ。

おまけ。

美緒と龍太郎が居酒屋で食事をしていると、注文していない皿が運ばれてきた。

「あちらのテーブルのお客様からです」

振り向くと若いサラリーマンらしき男ふたりが、隣のテーブルで手を振っている。意味が飲み込めない顔の美緒の耳に、龍太郎は小声を吹きこんだ。

バカに金使わせちゃおう。美緒ちゃんは普通に対応していいからね。

につこり笑った龍太郎は、そちらのテーブルに会釈してみせた。

美緒も一緒に頭を下げる。

龍太郎がブザーを押して店員を呼ぶと「それもこっちの伝票につけていいから、一緒に飲もうよ」と割り込んで来た。龍太郎は愛想の良い顔で頷き、ぼんやりしている美緒にメニューを指し示して料理を幾品かとドリンクを追加させながら、隣のテーブルの伝票についたことを確認する。

美緒と龍太郎が使っているのは、四人掛けのテーブルだ。

「OLさん？ふたりとも、可愛いね。まだ新人さんかな？」

なんて、男ふたりが席を移って来る。美緒は曖昧な返事を戻し、龍太郎はにこにこしていた。酔っ払いは陽気に自己紹介をはじめ、一見ならば会話が盛り上がって見えないこともない。

主に美緒が曖昧に受け答えし、時々龍太郎が頷いたり首を横に振ったりする。運ばれてきた料理に手をつけ、相手の皿にも盛り分けたりしてやるものだから、酔っ払いは上機嫌だ。

「ねえ、両方ともおとなしいね。名前だけでいいから教えてよ」

にこにこしていた龍太郎の肩に、ひとりが手を掛けた。

「ボーイッシュな彼女、名前はなんていうの？」

龍太郎の笑顔は、底意地が悪かった。

「龍太郎だよ。ついでに言うと、ボーイッシュじゃなくて、ボーイ
「うそおっ！」

龍太郎の声を聞いてどん引いた相手の手を掴み、胸へと導く。

「納得？どうも御馳走さんでした。美緒ちゃん、帰ろ」

自分のテーブルの勘定書きを持ってレジに向かう龍太郎に、慌て
て美緒は立ち上がった。

「ごめんなさいっ！失礼しますっ！」

相手が呆気にとられているうちに龍太郎に追いつき、もう一度振り向いて、恐縮した顔で頭を下げた。勘定を済ませた龍太郎が、美緒の腰に腕を巻き付け、出口へ誘導する。

その間残されたテーブルは、静まりかえっていた。

「・・・なんか、申し訳なくない？」

「勝手に勘違いしたの、向こうじゃない。女の子と仲良くしようなんてスケベ心なんだから、いいのいいの」

美緒の手を引きながら、龍太郎は笑った。

「ざまあみやがれ！」

こんなことには、慣れてる。生まれ持ったものを悔しがることに、本当は意味なんかない。努力してもどうしようもない劣等感なら、遊んじゃうしかないじゃないか。

だけど本当は好きな女の子の前で、あんな勘違いされたくなかったなあ。

握った手が、きゅっと握り返された。

「あたしには、龍君はどう見ても男の人なんだけどな」

「見せてないけど？」

「そこじゃないっ！」

そこじゃないのは知ってるけどさ、まともになんか答えられないじゃないか。照れくさすぎる。

いいんだ、美緒ちゃんが男だっと思っててくれるんだから。

「気をつけてね」

乗り換え駅まで美緒を送って、電車の窓に手を振った。

自分がそう見られたい相手が、ちゃんと理解してくれてるんだから、それでいい。それが一番欲しかったものなんだから。

f i n .

おまけ。
(後書き)

どこにアップして良いのかわからなくて、こちらにアップです。
ごめんなさい、もうしません。

結婚後「肩越しの青空」追加バージョン

「はい・・・はい、行きます。楽しみ！お祭り、大好き！」

龍太郎が帰宅すると、食卓の前で美緒が携帯電話に向かって喋っていた。友達とは専らメールでやりとりしているらしいから、相手は龍太郎の姉だと見当がつく。

おやすみなさい、と電話を切った美緒が、おかえりなさいの挨拶をする。居間でハーフパンツに置き替えた龍太郎は、洗面所で手を洗って、食卓についた。

「今ね、静音さんからなんだけど」

「うん」

「来週末、お祭りに誘われたの。龍君も一緒につて。大丈夫？」

「今のところ、大丈夫だけど。どこのお祭り？」

美緒が答えた沿線下りの駅名は、知っている。結構有名なお祭りで、何が有名かって・・・よさこい鳴子踊り。

ちよつと待て。俺はそれについて、暗黒の記憶が・・・

「良かった！静音さんが踊るつて言うから、一人で見なくちゃならないかと」

はしゃいでいる美緒は、龍太郎の顔には気がつかない。

「あたしの実家のほうでも、よさこいつてあったんだけど、なんか関東で一番古いよさこい祭だつて。静音さんのチームも踊るから、おいでつて言うの。お義兄さんが大旗振るんだつて」

確かに、静音から「踊り子になる」つてのは、聞いてた。だけど俺はもう、よさこいとは関わりあいたくない。あんなに楽しかったのに、それを全部パアにするような出来事が・・・

「あーいうのつて、地元だけじゃなくて他の場所でも踊るんだね。練習、大変だろうな」

「週に何回かね。鳴子の持ち方からはじめるから」

「静音さんは踊り子復活とかって言ってたけど、龍君は踊ってなかったの？」

答えたくない。

龍太郎がすつきりしない返事をするので、美緒は少し不満だ。

「本当は、イヤだとは思ってる？静音さんのチーム、比較的早い時間に終わるって言うから、一緒に夕ご飯の約束したんだけど」

「いや、それはいいんだけどさ。義兄さんにも会いたいし」

「じゃ、何？」

だから、答えたくないんだってば。ついでに言うと、チームに残ってる古いメンバーにも会いたくない。

龍太郎の返事はすつきりしないまま、八月の第一土曜日が来た。

「なんかね、会場が二つあるんだって。ステージ会場と流し会場。

えつとね、流しが先だって」

「ああ、静音のチームなら、流しの方が綺麗だと思うよ。今日の祭りはちよつとホームグラウンドと毛色の違う踊りだから、ルーピングしないで一回ごとに休憩が入るみたいだけど」

「ルーピング？」

「高知の祭りは曲をとぎらせないで、連続して踊るんだよ。今日の場所は、札幌と同じ方式」

あれ、と美緒は思う。

こういうことって、よさこい祭のある場所に住んでいる人は普通に知ってることなの？

「同じ家に踊り子さんが住んでると、いろいろ知るものなんだね」
龍太郎の返事は、やっぱりない。

駅から少し歩くと、賑やかな楽曲と威勢の良い掛け声が聞こえてきた。櫛並木の広い道を、ペットボトル片手に歩く。

「ここのお祭りって、屋台のある場所と演舞場が離れてるから、腹

が減ったら向こうに・・・」

「龍君、来たことあるの？」

駅からの道もキョロキョロせずに歩き、今のセリフだ。美緒じゃなくても気がつく。

なんだかヘンだよ、龍君。何か隠してるの？

「龍君、ここのお祭りに誘ってから、乗り気じゃなかったよね」

「いや、美緒ちゃんが楽しみにしてたんだから、いいじゃん」

「そういう問題じゃないっ！なんか隠してるでしょう？」

また答えない龍太郎に、美緒は妙な妄想に取り付かれていた。

前の彼女がここに住んでたとか、静音さんのチームに好きな子がいたとか、あたしならそんなこと、気にしないのに。

美緒が複雑な顔で黙ってしまったので、龍太郎は慌てた。

「・・・スミマセン。踊ってました」

「なんでスミマセンなの？やっぱり何かあるんでしょう？」

美緒ちゃん、静音に何か感化されてませんか。

「そこに忘れられない人がいるとか、踊っている時に告白されたとか」

ぜんぜん違います。暗黒すぎて、思い出したくないんです。

「そついうのと、ぜんぜん違うから。とりあえず、踊り見ようよ」

腑に落ちない顔の美緒を促し、通りに顔を向けた。

静音のチームの順が近付いたので、踊り子が集まっている石畳の公園に行くと、龍太郎が恐れていた面子が給水場に集まっていた。こそこそと顔を背けながら、美緒だけ静音の元に行かせようとする、目の前に筋肉質のデカい男が立ち塞がった。

「お、龍太郎君も見に来てくれたんだ。おい、静音、龍君が来てくれたぞ！」

声が大きいです、義兄さん。

姉が龍太郎の前に来るよりも早く、龍太郎よりも少し上の女の人

が集まって来る。

「あ、龍ちゃんだ！久しぶり！」

「龍ちゃん、今どこに住んでるの？え？奥さん？」

「うわ、大きくなったねえ」

大きくなってないです、中二の時から、五センチと変わってません。

「お、龍だ。おまえ、地元に戻って来ないのか？」

男も何人が寄ってくる。町内会で作ったチームだったので、古いメンバーは小さい頃からの顔見知りだったのである。

「龍君、なんか囲まれてますね」

取り残された美緒が、静音に向かって言う。

「うん、あいつはある意味、有名人だったから。本人は知らないだろうけど」

「本人が知らないのに有名って・・・」

「インターネットで、笑夢えむの美少女って検索してみ？」

美少女・・・って、だって、龍君の性別は。

「あいつの与り知らぬところで、写真が山ほどアップされてるの。本人知らないから、あれくらいで済んでるけど」

静音はニヤツと笑い、続きは後でねと言った。

「集合だぞお！整列して、進め！」

義兄は集団の舵取り役らしく、大旗を持ち上げて先頭に立っていた。

「えらい目にあった。美緒ちゃん、場所確保して、見よう」

龍太郎が道路に場所を移動したので、美緒も従った。

本人が知らないところで有名人っていうのは、踊っていたことを隠すことと結びつかないよなあ。

「龍君、踊りは嫌いじゃないんだね。見るのはイヤじゃないんだ」
また、答えがない。

『笑夢』と染め抜いた大旗が、低いところからはためきながらゆつくりと持ち上げられ、曲が始まった。

「わかんないっ！静音さん、どこ？」

華やかな衣装に、綺麗に結い上げた髪、大きな髪飾り。女性は全員そうなので、見分けが付きにくい。

「先頭のグループにいると思うよ。結構良い踊り子だから」

「いたっ！うわ、綺麗！」

鳴子の音が揃って響く。笑みを浮かべた踊り子たちが、優雅な動きで前に進みながら踊る。

「龍君も、あの中にいたの？」

「・・・いたけどね」

けど、何？

到着地点までついて歩いて、静音に声をかける。龍太郎は遠巻きだ。

「すっごく綺麗だった！静音さん、上手！」

「あたしより才能のある踊り子、いたよ？一緒に先頭を踊ったことがあるんだけど、新聞に写真が載ったら消えちゃった」

「写真の写りが気に入らなくて？」

「すっごく美しく撮れてたの。タイトルが、『笑夢の美少女姉妹』でね」

「姉妹？」

「一目で身内だってわかるほど、似てるし」

「・・・姉妹？」

篠田家は、姉弟の筈。新聞に、姉妹？

「え——っ！」

龍君、ごめんなさい。来たくなかった理由を、今理解しました。よさこいが、トラウマだったんですね？

静音の元を離れて龍太郎の前に立った美緒は、心底気の毒そうな顔になっていた。

ああ、聞いちゃったのか。暗黒な記憶・・・

「大丈夫龍君っ！ちゃんと成長して、男の人になってるから！」

何の慰めにもなってます。成長する前から、性別は男だったんです。

「子供の頃なら、静音さんと同じ顔が並んでたら、さぞ可愛かっただろうなあって」

静音に最初に会わせた時、俺と同じ顔だと言ってませんでしたか。

更に肩を落とした龍太郎の横を歩きながら、美緒はこっそりと、帰宅したら「笑夢の美少女」で検索してみよう、と思っているのだった。

f i n .

結婚後「肩越しの青空」追加バージョン（後書き）

もつしませんって、二度と言いません。だから、舌ぬかないでええっ！

そして、龍太郎の「暗黒の記憶」が理解できない方は、「肩越しの青空」の4話目を参照してみてくださいまし・・・ごめんなさい。

藤原の見解（前書き）

ごめんなさい。龍も美緒も、直接は出てきません。

藤原の見解

篠ちゃんの結婚式のスピーチを考えながら、羨ましくなった。ずいぶんスローペースではじまった篠ちゃんの恋愛は、加速度をつけて進み、とんとん拍子に結婚に行き着く。

はじめて松山さんと鈴森さんに会った時、篠ちゃんがどっちを見ているのか、すぐにわかった。篠ちゃんは、いわゆる「男ウケする女」は好きじゃない。会社の中で篠ちゃんに近付こうとする女は居たけど、寄せようとしていなかった。

顔を寄せられると、男ですらドキッとしてしまうような容姿の篠ちゃんは、中身はかなり男くさい。可愛いしい見た目（って言うところ怒るけど）と如才ない対応で、女の喉元に迫るのは、天才的だ。本人は無意識だから、女の方はたまったもんじやないと思う。

本人に言ったら怒るから言わないけど、設備部じゃなくて営業部だったら、奥様方からの圧倒的な支持で、成績は上位だったんじゃないかと思う。あ、旦那様方から反感買うかな。

松山さんは、本当に色気のない女の子だった。着るものも機能性重視に見えるし、驚いた顔も嬉しい顔も隠そうとしない。くるくる変わるその表情は、子供そのもの。俺にも鈴森さんにも篠ちゃんの目当てがわかってるのに、誘われた当人はまるで自覚ナシだった。表情は無防備なくせに警戒心だけやたら強くて、篠ちゃんがどう持つて行くのか、見ものだと思った記憶がある。

それでもヨタヨタとはじまった時の、篠ちゃんのめろめろっぷりは、微笑ましかった。朝の当社時に手を繋ぎかねない顔に、普段の見かけによらず硬派な篠ちゃんのイメージは、俺の中で覆った。まあ、かわいいことかわいこと。

……そんなこと言ったら、得意のボディーブローが来るけどね。

部屋に來たの料理が上手だのって聞いてたから、まだコトを行ってないと聞いたとき、心底驚いた。篠ちゃん自身がケーケンホーフなのかどうかは知らないけど、けして晩熟なわけじゃないことは、知ってる。松山さんみたいに慣れない女の子を押し倒しちゃうなんて、難しいことじゃないだろう。

「焦って怖がらせたくないし」

成人式をとうに過ぎた女に、そんなに慎重になるほど、本気だったのか。その時に初めて、篠ちゃんを羨ましいと思った。

それまで、決まった女の子がいるのっていいな、巨乳は好きだけど、それだけじゃなあ……なんてノリだったのに、そんな次元とは全然違う感情なんだ、そう改めて思った。例えば松山さんが海で溺れそうになったら、篠ちゃんは後先考えずに、海に飛び込もうとするんじゃないだろうか。そんなことを思い浮かべた。

良かったね、そんな相手に出会えて。胸はないみたいだけど。

春が過ぎた頃、松山さんは急に綺麗になった。全身から幸福なオーラを出しているような松山さんに、注目した男は多分多かったと思う。その頃から篠ちゃんは、「常に一緒にいること」を考え出してたんじゃないかな。仕事にも熱が入って、他人よりも多く動くようになった。同じ頃から女子社員たちが「化粧させたい」なんて言わなくなったのは、中身が顔に出てきたからだと思う。

今現在篠ちゃんは、性別を間違えられることが少ない。（皆無じやないってところは、気の毒だけど）

表情から甘さが消えて、強さが前面に出たのだ。松山さんと一緒の時は、のんびりした顔になってるけど。

どんなスピーチにしよう。身近で見ていた馴れ初めから話そうか。それとも。

「篠田龍太郎君。いや、篠ちゃん、美緒ちゃん。ご結婚おめでとう
ございます。僕は君たちを、とても羨ましく思っています……」

f i n .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6570p/>

しあわせになりたい

2011年12月1日18時52分発行